
時は戦国

田中 遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時は戦国

【Nコード】

N3122D

【作者名】

田中 遼

【あらすじ】

戦国時代。若い兄弟が炎に囲まれ、絶望しているところから物語は始まる。皆が全てを得るために戦い続けた時代を、この兄弟が、しっかり者だが感情的な兄と抜けていながら誰よりも冷静な弟が、どう生きたのか。そして、天下取りの策略が、二人の前に繰り広げられていく。

第一話 雷と風

兄弟は炎に囲まれていた。弟はへなへなと座り込み、活路を見い出せず、全てを呪っている兄を呆然と見た。彼は兄がそんなことをする状況をよく理解していた。本当に怒っているときと、本当に絶望しているときだ。後者の状況であることを悟った弟は、兄が怒ると分かっていたが、泣き始めてしまった。

「風丸！ 泣くな！ 泣いても何にもならん！」

目をこすりながら風丸が言った。

「けれども兄上様、泣かなくても何にもならないじゃないですか」

「馬鹿！ 屁理屈を言っているときではない！ それに……」

彼は決まり悪そうにもじもじした。

「我らは兄弟とはいえ、双子なのじゃ。“兄上様”などというな」

兄のほうの名は雷助。風丸より1時間ほど早く生れただけだが、確実に兄としての資質を備えていた。弟をいつも気遣い、守った。決断力もあり、家来を自分の意図通りに動かす能力も片鱗を見せ始めていた。ここまで聞くと、彼がいくつ位に感じられるだろうか。少なくとも12歳などとは思わないだろう。そんなわけで、彼は周りから特別な扱いを受けることが多かった。

“次の主は雷助様だ”という考えなのだ。だが、彼はいくつか持つべきものを持っていなかった。一つはたった今失った。思い出して

もらいたい。彼と風丸は赤や橙をまとった　　文字通り熱狂的な踊り手と木が弾けるパチパチという音、それに踊り手から出る喉を焦がす熱風に囲まれているのだ。彼らは“家”を失った。

雷助は誰かが助けに来ると風丸に言ったが、風丸は助けが来ないことを知っていた。見ていたからだ。一部始終を………

「起きて下さい!!!」

風丸は揺さぶられ、揺さぶられてからようやく目を覚ました。雷助はすでに姿勢を正し、風丸を起こした従者が何か言うのを待っていた。従者は緊迫した表情をしているが、風丸には分からなかったようだ。彼は大きく伸びをして、ボサボサの頭をボリボリかいた。吉左衛門は（従者だ）風丸を無視し、雷助に向き直った。

「若、城が囲まれております!」

「何?どこの軍じゃ?」

「分かりませぬ。ただ、数は数千……」

「数千?……こちらはせいぜい二百程度だというのに……何故……?」

吉左衛門はかぶりを振った。

「分かりませぬ。いきなり鉄砲玉を打ち込んできた上、こちらの使

者は颯り殺す……いつたい誰が率いているのやら……」

雷助はさっきまで寝ていたのが嘘のように、すくっと立ち上がった。うとうととしていた風丸はぼんやりと顔を上げ、兄を見た。

「吉、用意をいたせ。わしも戦う」

「なりません」

そういつたのは吉左衛門ではなく、風丸だった。

「……風丸？」

「兄上様が戦っても、命を捨てるだけです」

風丸は自らの口から出た言葉の重さに気付いていないようだ。彼は目ヤニのついた目を懸命にこすっている。雷助は風丸を睨みつけていたが、羨む気持ちが出てきていた。

“こんな風にいつでも冷静なままでいたいものじゃ……”

気性の激しい雷助は感情のまま動いてしまうところがある。そうしてしまうと、主として家を守ることは出来ない。雷助の欠点の一つである。それを猛烈に意識した瞬間、ふつふつと怒りが煮えたぎってきた。しかし、風丸はそっぽを向いて欠伸ばばかりしている。それが雷助をさらに煽った。雷助の手がピクリと動いた。刀に向かって。吉が慌てて間に入った。

「若……雷助様。ここは風丸様の言うとおりですぞ」

雷助の怒りの矛先が吉に向きかけた。吉は一瞬ひるんだが、すぐ気を取り直し、睨み返した。

「親方様もそうお考えです」

「父上が!？」

雷助は一瞬気が抜けたような顔をしたが、すぐに顔が赤くなってきた。

「では、今までの修行は何だったのだ!？」

雷助はいきり立って叫んだが、吉は静かに言っただけだった。

「この先の戦いで、役に立てるためです」

「この先だと……?」

頭に血が上った雷助は吼えた。

「家が滅んだ後、先があるわけ無からう!!!」

風丸が何か呟いた。吉はそれが聞こえたらしく、啞然として風丸と雷助を交互に見た。雷助は怪訝な顔で吉を見た後、風丸に聞きなおした。

「風丸、何か言ったか？」

風丸は彼を見もしないで再度呟いた。

「そうとしか考えられないのが兄上様の短所だ、といったんです」
一瞬、3人の動きが止まった。遠くで誰かが慌しく動いている音が聞こえてきた。雷助の怒りはすっと消え、さらに大きくなって戻ってきた。

「……………なんだと？」

風丸は、この時初めて兄を直視した。雷助はたじろいだ。といっても、風丸が恐ろしい眼光を放っていたわけではない。その逆だった。あまりに静か過ぎる、その目が雷助の心をなえさせた。

「死を恐れないのは、ただのうつけでしょう」

恐怖し、おびえきつた人間がそれを言うならまだ分かる。どこから見ても臆病者であるものが、命にしがみつくのは合点がいく。しかし、風丸はそんなものを感じている気配が微塵もなかった。雷助は弟が己の理解を超えていることを知っていた。

「風丸、わしはお主がよく分からん……………」

「兄上に理解してもらえらなくても、ずっと先の話……………今はそれより、早く逃げましょう。兄上や風丸のために戦っている者の命を無駄にしたくありません」

風丸は吉に向き直った。

「吉、頼むぞ」

「は…」

その時、スツと障子が開き鎧の男が入ってきた。雷助は刀に手をや
つたが、見知った顔を見て緊張を緩めた。

「……脅かすな、忠義。父上はどうした？」

異常に静かなこの部屋では、忠義ののしっのしっという足音がとん
でもなく響いた。

第二話 静かなる風

「……………なんじゃ？」

雷助は目の前に立ちはだかった大男を下から睨みつけた。

「……………下剋上にござりまする」

「！？貴さ……………グツ！」

雷助の腹に忠義の拳がめり込み、彼を倒した。わめき声を上げて忠義に飛び掛った吉左衛門は、刀であっけなく首をとばされた。忠義は背筋が凍ったかのような感触を覚え、振り向いた。

部屋の真ん中に風丸が座っている。静かな殺気を放っていた。

「……………お主が企んだ事か？」

「……………いえ、私だけではありませぬ」

風丸はスツと立ち上がった。手には何もなかったが、忠義は飛びのいた。

「歯痒い……………天下人ではなく、天下人の配下を志すものに家が滅ぼされるとは……………！」

忠義の目が驚愕した。

“この幼子は何者じゃ……………？　ここまで才のある子供とは……………”

・・・”

「だが、忠義」

静かに光っていた風丸の目が外を向いた。

「お主らは捨て駒としか思われていないぞ」

「何？」

忠義は自らが開け放した障子の外を窺った。闇があるのみである。と、その闇に無数の火が灯った。

“・・・？”

忠義が訝っている間にその火はどんどん迫り、庭や屋根に突き刺さった。寸前で飛びのいた彼の足元にも。

「火矢か！！」

障子にいと簡単に火がつき、燃えてゆく。

「哀れだな、忠義」

風丸はまだ“静けさ”を保っていた。いつの間によら、抜き身の刀を握っている。

「この乱世・・・一人で生き抜くことなど出来ぬぞ」

「・・・この家に仕えていても、同じこと」

火は炎に変わりつつある。風丸の周囲も、その目の中也。

「行け、忠義。弱肉強食のこの世でわしに食われるときまで生きていろ」

忠義は薄ら笑いを浮かべた。

「……わしが今そなたを斬る。雷助もだ。それでもわしを食らうことが出来るかな？」

「……やってみるがいい」

忠義は中段に構えた刀を横になぎ払った。炎を斬るほどの鋭さだったが、風丸は消えていた。

「お前の剣はいつも同じだ」

風丸はしゃがみこんだまま、剣を振り上げた。咄嗟にかわした忠義だったが、刀の切っ先が彼の頬を切り裂いた。

「ゲ……」

彼が頬を押さえ、炎の外に後ずさったその時、塀の外からときの声が上がった。火矢を放った軍が山側から押し寄せている。

風丸の静かな声が炎の向こうから聞こえてきた。

「忠義、去れ。」

忠義は無念そうに刀を納め、最後の命令に従った。

彼がいなくなると、風丸はしばらくぼんやりとしていた。虚ろな目が辺りを見回す。

“……………?”

「あ、兄上様!!」

そしてようやく雷助を起こしにかかった。その目は周りの炎にはじめて気付いたかのようにおびえていた。

雷助がおきたとき、彼らは三方を炎に囲まれており、おびえきった風丸はまだ血の滴る刀を握っていた。

「……………なんだ？何がおきている??」

「裏切りに便乗して、どこかの軍が火矢を打ち込んだんです」

「吉は？あいつも……………」

「……………殺されました」

雷助の目が風丸の刀に向けられた。

「……………それは？」

彼は血をさっと拭い、刀をしまった。

「……………それより、早く逃げましょう」

二人が立ち上がった瞬間、唯一火の回っていない場所の天井が崩れた

第三話 進むために

物語は始めに戻る。

風丸は絶望して頭が垂れた。彼が諦めたのが分かった雷助は思いつきり刀を叩きつけた。

「糞オ！！！！」

風丸はガバツと顔を上げた。目が真ん丸くなっている。

「兄上、今、何処に叩きつけました!？」

「何・・・?」

しばし、木のはじける音しか聞こえなかった。

一拍おき、風丸が刀を腰から鞘ごとはずした。そして、雷助が刀を叩きつけた辺りの床を手当たり次第に殴りつけた。

「か、風丸?」

らしからぬ行動に、雷助は驚いて見つめることしか出来ない。

しばらくして彼は床を叩くのをやめた。兄を振り返った目がぎざぎざに輝いているのは、炎のせいかもしれない。

「兄上、ここです!!」

「なに？」

風丸はもう一度地面を叩く。にっこり笑って。

「……………そこが!？」

「分かりませぬ。でも、確かに何か空間がありますよ」

兄弟はさつと畳を持ち上げた。

「……………しかし、風丸。こんな簡単に見つかるどころにあつてよいのか？」

「……………一番陰が濃いところを知っていますか？」

風丸はその空間に飛び込んだ。

「灯かりのすぐ近くですよ」

雷助も刀を拾い上げ、その後に続いた。

中にちよつとした鉄の蓋がある。二人がそれをあけると、中には闇が広がっている。

「……………」

「……………」

風丸は躊躇いなく飛んだ。

「アイタ！」

意外と浅いらしい。雷助は跳ぶと同時に蝶番の鉄の蓋を閉めた。

雷助は闇の中、猫のように音もなく着地した。手探りで辺りを探ると、誰かの顔を触った。当然、風丸である。

「して、ここからどうする？」

「……もう少ししたら目が慣れるかと」

その通りだった。ぼんやりと互いの輪郭が浮かび上がってくる。

「風は……こつちから流れている」

雷助は風丸の後ろのほうを指差した。

ズン！！

上のほうから聞こえてきた音は、何かが崩れる音。二人は上を見上げ、しばしたたずんでいた。が、どちらからというわけではなく、風の吹くほうに歩き出した。

「……」

“……絶対にこの仇は……”

「敵討ちなど考えないでください。」

珍しく兄より先を歩いている弟が静かに告げた。雷助は一瞬動きが止まったが、一歩で距離を詰め、その肩をつかんだ。

「口惜しいとは思わんのか！？父上はもちろん、おそらく母上も……！」

「……仇を討つても、帰ってきてはくれませぬ。」

「貴さ……このうつけがあ！」

雷助は彼の肩を引っ張り、自分の方に向かせようとしたが、風丸は全く動かない。そっぽを向いたまま彼が呟く。

「私は、天下を取りに行きます……出来れば兄上と一緒に」

「な……に……？」

弟のあまりに大きな発言に雷助は動揺を隠せない。

「……それが私の、この乱世に対する復讐です……！」

「……乱世に対する……？」

雷助は手を放した。どちらにせよ風丸は動かなかった。

“……これは……本当に風丸か？ わしと同じ年の幼子か！？”

雷助はそう思った。

闇の中、誰にも知ることが出来ない中、風丸は泣いていた。

歯を食いしばり、声を出さないようにして。

何故？

兄とともに、“前”に進むためである。

“……仇討ちをしても……忠義を討つても……進めはしないのです……許してください、父上、母上……！”

風丸は、仇討ちを良しとしない、自分の思考を呪った。涙は、止まらなかった。

第四話 刀は輝く

歩いても歩いてても、先にあるのは闇ばかりである。年若い兄弟は疲労困憊していた。

闇の中、すぐ近くにいるはずの片割れの姿も見えない。

「…………風丸、何処におる？」

「…………ここです、兄上」

声のしたほうに手を伸ばすと、風丸の着物をつかむことが出来た。

「休もう」

「ハイ…………」

雷助は風丸をつかんだままで横になった。自分の袖がつかまれたのを感じ、少し、安心した。

二人は、張り詰めた糸が切れたかのように眠りについた。

ハッ

雷助は急激に目覚めた。心臓が鳴り響き、体中に汗をかいている。細かいことは覚えてないが、昨夜の夢だ。

“……嫌な夢だ……”

身を起こそうとすると、着物が何かに引っかかった。風丸の手にしつかりと握られている。その時、弟の顔に涙の跡があることに気がつく。

“こいつ……昨夜は強がっていたな？”

と、何処からかの光に照らされていることに気付いた。目指す方向に“光”が見える。

「おい、風丸！」

「ふが？」

間抜けな声を上げた風丸を揺さぶり、さらに言った。

「起きろ！」

「起きてますよ……」

風丸はまだ開いていない目をこすると、大きく伸びをした。

「……なんですか？」

「ほら、行くぞ、光が見える」

「…………ふあい」

雷助は、弟を半ば引きずるように歩き出した。

太陽の光が、この悪夢をはらってくれるかもしれない。

そんな淡い望みを抱いていた。

日が木々の間に見える。すでに高く昇っているようだ。闇の中にずっといた彼らには、まぶしすぎるほどだが、実際には薄暗く、じめじめとした場所である。山中の林らしく、斜面にたくましく根を張り、捻じ曲がって伸びた木が多い。

到底、人の気配はない。雷助は溜息をついた。彼の弟は日の光を見て、目が覚めたようだ。

「兄上、どうします?」

「この…………獣道に行くしかあるまい」

雷助はわずかに草の倒れているところに目をやった。

「なら、この寝巻きは目立ちすぎますね」

彼らは白装束を身にまとっていた。

「……どうするのだ？裸で歩くわけには行かんぞ」

「じじするんです」

風丸は、地面の泥を服になすりつけた。

“ほう……”

すぐに檜皮色の着物が出来上がる。彼はさらに、木の葉をもみ、なすりつけた。

「やるのお、風丸！」

感心した雷助は、彼を真似て着物を汚し始めた。と、その途中で、自分の顔にも泥を塗りたくっている弟が目に入った。

「な、何をしておる！？」

さすがに一步下がる。

「じじすれば、ごまかせるでしょ？」

風丸には、兄が怪訝な顔をしている理由が分からなかった。

雷助も嫌々顔を汚し、二人は何処から見ても農民の子のようになっ
ていた。ある一点を除いて。

二人はそれに気付いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

腰の刀だ。

「・・・・・・・・・・兄上・・・・・・・・」

「死んでも置いてゆかんぞ」

風丸は微笑んだ。

「私も、そのつもりです」

風丸が刀を抜き払い、突き上げる。

「これは、父上、母上の形見・・・・・・・・例え妖刀であろうとも、手
放すことはありません」

雷助も力強く頷いて刀を抜き、突き上げた。

空に向かって掲げた二本の刀は、日の光を受けて、輝いた。

第五話 久しぶりの食事

獣道は、途切れそうに途切れぬ。一歩進むごとに人影を探しているのだが、一向に見えない。

「兄上……」

「分かっておる」

「……腹が減っては戦が出来ませんよ」

「分かっておる」

「……」

二人は何も口にしていなかった。そろそろ限界だった。

「……もう、諦めましょうよ。この……」

「ええい！五月蠅いぞ！」

「何故そこまで嫌がるんです？ただの葉ですよ！？」

「わしの……」

「誇りは捨てなければ！生きるために！！……この新芽なら何とか食べれそうですよ？」

風丸はむしゃむしゃと食べ始めた。雷助はそのまま歩き続けようと

したが、その食べる音に負け、新芽を引きちぎって口に入れ、噛んだ。

口の中に青臭さが広がり、雷助は息を止めて飲み込んだ。ようやくのどを通り、ホッと溜息をつくとき、弟が口に次々と葉を押し込んでいた。雷助はそれを横目で見ながら、二枚目の葉を手の中で弄んでいた。

「……………ずっと疑問に思っているのだが……………ここまでして生きる意味はあるのか？」

雷助は弟に問う。風丸には、そんな質問は思ってもみない問いかけだった。

「……………生きるのに理由は必要なのですか？」

風丸はおかしな質問をする兄に、逆に問いかけた。

「……………何事にも理由はあるものだろうか？」

「……………兄上、何か飛び道具は……………？」

風丸が急に囁き声になった。

「そんなもの……………」

「し！あそこに鹿が……………」

「何!？」

確かに鹿が一頭、木の向こうでひよこひよこ歩いている。二人は息を殺していたが、鹿はそのまま通り過ぎた。

「……………待ち伏せますか」

「木の上でか？また通るとは……………」

「このまま歩いてても無駄に体力を消費するだけです。そろそろ日も暮れそうですね、木の上で一晩過ごしましょう」

雷助は少し首を傾け、同意した。風丸は猿のようにスルスルと木に登っていった。雷助がちょっともたつきながら後に続いた。

「……………兄上！」

雷助は囁き声と揺さぶりで目が覚めた。

「む……………？」

「鹿が来ました！！」

「え？」

確かに真下で鹿が木の葉をムシヤムシヤ食べている。

「……………まあ、こっちも生きるか死ぬかだ。鹿も許してくれる

だろう」

「何の問題もありませんよ。兄上、任せました」

風丸はにっこり笑った。

雷助は刀を振りかざし、木から飛び降りた。

風丸が木をこすり合わせている間に、雷助は鹿を刀で器用に解体してしまった。

「火は熾きたか？」

「今ようやく……………」

風丸の荒い息が火を煽り、しばらくして木の弾けるパチパチという音が聞こえてきた。そこに鹿肉をかざしながら、二人はじつと黙っていた。

二人とも、同じ事を思い出していた。

「……………ふう……………」

二人とも、久しぶりの肉を腹いっぱい食べ、満足げに体を伸ばした。それでもまだ半分ほど残っていた。

「この肉、持って行きますよね？」

「そうしよう」

彼らは炎に新たな燃えだねを投げ込み、勢いよく燃え上がらせ、鹿肉を炙った。

「……………表面だけ炙っておきましょうか？」

「そうだな。火も消したほうがいいのかもしれん」

そうだったが良いが、雷助には、火を消す手段が思いつけなかった。

「……………そんなに風もないことだし、大丈夫だとは思うが……………」

ふと気付くと、弟が土を炎にかぶせ、消してしまっていた。

「……………」

彼らは眠りについた。

第六話 頼るべきもの

雷助は飛び起き、刀を抜いた。

「誰じゃ!?!」

朝の光が目にし込み、めまいを覚えた。

「おいおい、物騒なもん振り回すガキだなあ!」

上半身裸の青年が笑いながら一步飛びのいた。雷助は彼を睨みつけ、刀を構えた。

「……………風丸……………」

返事がない。

「おい!」

足元を見ると、彼はそこにいなかった。

「……………風丸をどうした……………!?!」

「まで、落ち着け。お前、名前は?」

「……………雷助」

「雷助、俺は“吉”じゃ」

「……………吉……………?」

「聞き覚えがあるはずじゃ。まあ、後でゆっくりと思いつけば良い。それよりもじゃ」

彼はきつと空を睨んだ。

「猿を信用してはいかん」

「……………猿……………?」

「しかし、“竹”は信じて大丈夫じゃ」

「“竹”?」

「狸といった方が分かりやすいか」

「!?!?」

「よいな」

「私はてつきり、その逆と……………」

青年は快活に笑った。

「そうだろうと思ったんでな。雷、しっかりと生き延びるのじゃ」

景色が急激にぼやけ、一気に遠ざかって行った。雷助が必死で伸ば

した右腕は、何も捕らえることが出来なかった。

「吉……吉法師……!？」

目が覚めると、手が天に向けて伸びていた。暖かいものが頬を伝っていた。

「……兄上？」

「風丸……」

雷助はむくりと起き上がった。東の空から光が漏れ始めている。

「……どちらに向かっていたか、分かるか？」

唐突な質問だったからかもしれないが、彼は言葉を濁した。

「……兄上は反対するかもしれませんが……」

「??？」

「猿よりも……狸に頼ろうかと思えます」

“!!!”

「ほう……何故じゃ？」

雷助はこの頼もしい弟の考えが知りたかった。

風丸は躊躇いながらも、しっかりとした声で告げた。

「猿が……父を討ったように思えてならないのです……」

「!？」

予想外の言葉に、雷助は驚いた。風丸の目が静かな光を放っていた。

「おそらく、直接は動かず、誰かを唆して父を倒し、その後でその、“誰か”を討ち、天下を盗ろうとしている……」

「……風丸……」

「……憶測に過ぎませんが、ね」

雷助には、それが信すべきことに思えた。

「しかし、そうだった場合、あの者も相当危うい位置に……」

「……まずは村に下りましょう。行く先も決められない」

風丸はすくつと立った。

夜には気付かなかったが、眼下には、小さな村がひっそりと存在していた。

第七話 殺気立つ村

一人の村人は厳しい農作業の途中、ふと顔を上げた。と、山から小さな影が二つ、こちらに歩いてくるではないか。

「なんだあ？」

何より目を引いたのは、その腰の刀だ。

「侍にしちやあちいせえなあ」

「何処のガキだあ？」

二人は気にも留めずあぜ道をすたすた歩いていった。と、目の前に少年が10人ほど立ちふさがった。その真ん中の体の大きい子が（15、6歳といったところか）唸った。

「おい、お前たち、ここに何のようだ？」

「……お前らには関係ないだろ」

一番端のやせた子が、高く、耳障りな声で言った。

「そつは問屋が卸さないぜ！」

「あん？」

「この村にはいるには、通行料を払ってもららうぞ！」

「通行料？持ち合わせはない」

風丸が両手を広げて見せた。

「その腰の刀を置いていつてもらおうか」

「………大概にしろ」

雷助が激怒していた。その顔を見て、真ん中にいた子以外はたじたじと後ずさった。

「兄上」

「なんじゃ！？」

「………まさか、暴れるつもりですか？」

「そっだ」

「………刀をよこしてください」

雷助は素直に刀を渡した。風丸はそれを腰につけ、溜息をついた。

「兄者と戦うんだったらそれもよいが、その気がないなら、長のところ案内してはくれないか？」

「………元ちゃん」

「俺はやる」

“元”は指をバキボキ鳴らした。

「俺を負かしたら案内してやる。ただし、俺が勝ったら刀を置いて
いってもらっぞ」

「まるで追いはぎだな」

どさっと言う音に振りぬくと、風丸が座って退屈そうに山を見てい
た。

「……………風丸、なんか激励の言葉はないのか？」

「……………骨折ったりすると、後が面倒ですからね。手加減
してくださいよ」

「……………」

あっという間に決着がついた。

頭一つ以上に違う二人が組み合ったとき、誰がどう見ても元が有利
に見えた。

しかし、彼の体は軽々と持ち上げられ、泥沼の中に放り込まれた。

「……元ちゃん!!!」「……」

風丸は気のない目でそれをちらりと見やり、また溜息をついた。

「手加減してくれと……」

「うつけ！だからその沼に投げ込んだんだろうが」

「……ゲホ！ゲホ！」

下では、沼から元が引っ張り出された。必死で口の中の泥を吐き出している。

「……約束は守ってもらおうか」

「……お前、名前は？」

「雷助。こつちは弟の風丸だ」

「強えな……」

「刀は飾りじゃないからな」

「……着いて来いよ」

彼は着物を袖でぬぐいながら歩き出した。ただ、着物も汚れていた
ので、大して汚れは落ちなかった。

雷助も風丸も、周りの大人たちが殺気立っているのに気付かざるを
得なかった。村の入り口に足を踏み入れた瞬間、その中にいた全員
が動きを止めた。

“・・・・・・・・なんだ・・・・・・・・？”

“兄上、後ろ・・・・・・・・”

“！？”

先ほどまで農作業に従事していたものどもが鍬や鋤、鎌を待ち、二人の逃げ道を塞いでいる。

「・・・・・・・・」

二人は元の背中だけを見て歩き続けた。

実際、案内の必要はなかった。道は一つしか選択できない。ずらりと並び、腕を組んでこちらを見ている村人を押しつけても仕方がないからだ。

元は一つのぼろ屋の前で立ち止まった。

「ちょっと待ってる」

そういうと、彼は中に入った。

“・・・・・・・・！！”

村人は二人を中心にぐるりと囲んでいた。皆が皆、どちらかの手に武器を握り締めていた。

“・・・・・・・・？”

第八話 小太刀を持った少女

雷助は油断なく全体を見ていたが、風丸は右のほうの一点を見つめていた。

“……………”

そこには、一人の少女がいた。同い年か、一つ下ぐらいの娘だ。端正な顔立ちをしている。ここまでならば、風丸が一目ぼれをしたように思えるが、それだけではない。小太刀を構え、風丸を睨みつけている。風丸はその視線を静かに受け止めていた。

風丸に少女の叫びが伝わってきた。

“……………殺してやる”

風丸が刀を抜き払った。

村人がざわめき、一、二歩下がった。が、女の子は動かない。

「風丸！」

雷助が彼の肩を掴んだが、風丸は軽くそれを払った。

「……………兄上、大丈夫です。下がっててください」

雷助は訝りながらも素直に下がる。その後風丸は少女に向き直り、刀を右手に持った。

「・・・・・・・・来るなら来い」

「・・・・・・・・!!」

彼女の顔がいつそう険しくなり、ぱつと駆け出した。

少女は太刀を使うほど力がなかった。しかし、小太刀なら、使いこなすことにくわえ、速さ、身軽さを最大限生かすことができる。

風丸に切りかかったとき、彼女は風のようにだった。

「ウオオオオオ!!!!」ガキン!

風丸は片手だけでいとも簡単にそれを受け止めた。彼が使っているのは、普通の太刀である。

驚きのあまり、彼女の顔から怒りが消えた。

「!!」

「どうした、殺したいんだろ？」

少女の目に憎しみが一瞬で戻ってきた。パツと飛びのき、再び猛進する。

「デヤア!!」

彼女の小太刀は空を切った。急停止して振り向くと、跳び上がった風丸が優雅に着地するところだった。

「惜しかったな」

「・・・・・・・・・・！！！！テヤア！！！」

何度やっても同じだった。どう攻めても優雅にかわされてしまう。

「糞オ・・・・・・・・・・！！！」

汗だくの少女は肩で息をしている。風丸は息を乱すどころか、汗すらかいていない。

「・・・・・・・・・・あいつは天狗か？」

野次馬はただただ感心しているだけだった。

「気が済んだか？」

「まだまだ！」

彼女はまたしても突っ込み、右手一本で風丸の首をかこうとした。

“・・・・・・・・・・冷静さを失ったか・・・・・・・・・・”

風丸は体をひねるだけでそれをかわした。

少女が狙っていたのはその瞬間だった。

左の手首をちよつとひねると、銀の物体が飛び出し、風丸の喉を狙った。

“ まずい………！！ ”

“ 殺った！！！！ ”

勝利の確信は一瞬だけだった。

“ ！？ ”

彼女の腹を何かがち、彼女の動きを止めた。仕込んであった短刀は、切っ先が風丸の喉に届いていたが、一筋の血を流したに過ぎない。

少女は自分の腹を見下ろした。風丸はあの咄嗟で、身をのけぞらせながら、左手で腰の鞘をはじき出し、彼女の鳩尾辺りを強打していた。

「 ……ドサ！ 」

風丸は彼女をさつと抱き起こした。

「 風丸！！ 」 “ 危ない！！ ”

雷助と違い、風丸は彼女を完全に信用していた。

「 大丈夫か？ 」

「・・・・・・・・・・強いね・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・最後はだいぶ危なかったけどね」

「・・・・・・・・・・よく言うよ・・・・・・・・・・名前は何？」

「風丸。キミは？」

「・・・・・・・・・・胡蝶」

カクツと首が下がり、村人が悲痛な声を上げたが、風丸がちょっと笑いながら言った。

「心配御無用。寝息立ててるよ」

その寝顔が風丸の視線をひきつけていた。

“ 小さな・・・・・・・・・・ ”

雷助はそれを細目で眺め、一人でニヤついていた。

第九話 風は嵐となる

「!?!? 胡蝶! 貴様ら、何をした!?!」

元が出て来て、胡蝶を支えている風丸に掴みかかった。風丸はその手をぼんぼん叩いた。

「ちょっと斬りかからただけだ」

「……………!! こいつはなあ!!」

「よせ、元」

ぼろやから老人が顔を出した。目だけがぎらぎらしている不気味な人だった。

どうやら、この村では、この人の言葉が絶対の力を持っているらしいかった。元は風丸を睨みつけながらもその手をゆっくり離れた。

「客人、お待たせしてすまない。さ、中に入りなされ」

風丸は胡蝶を元の腕に押し付けた。

「その娘を頼むぞ」

「頼むつて、おい!?!」

「馬鹿だな、どっかに横にならせて水を飲ませるぐらいのことはしてくれ」

「てめえで責任を取れ！」

「・・・・・・・・兄上・・・・・・・・」

雷助は老人に聞いた。

「ご老体」

「ん？」

「彼女も中に入れてもよろしいですか？」

「・・・・・・・・よかろう」

元は風丸の腕に彼女を押し付け、その場にドカリと座り込み、中に入っていく4人を睨んでいた。

風丸が彼女を解放している間、老人と雷助は無言で対峙していた。互いに相手の目を睨みつけ、その奥底の感情を知ろうと試みているようだった。

風丸はその気配を敏感に感じ取っていた。

“馬鹿げている・・・・・・・・兄上は何をしているんだ？”

雷助は瞬きもしない。

風丸は水を汲み、胡蝶の口に含ませた。

“出来るだけ早くこの村から去ったほうがいい……何かが変わだ……”

「……………ん……………」

「お。気付いたか」

「あれ……………」

風丸は彼女を起き上がらせ、耳元で囁いた。

「あの老人の家なんだけど……………彼は何者？」

「えっと……………山の神様って聞いたことある」

「神様？」

胡蝶はこくと頷いた。

「地震とか、洪水とかを教えてくれるの」

風丸は彼女の戸惑いに気付いた。

「……………ねえ。何でここにいるか分かる？」

胡蝶が首を横に振った。その様子は先ほどまでと違っていた。

「兄上!!」

風丸が急に大声を出したので、雷助も胡蝶も飛び上がった。

「元と話してきます。それまでそのインチキ爺ジジイを見張っていてください!」

彼は荒々しく老人を睨みながら、優しく胡蝶を立たせるという離れ業をしながら戸口から出て行った。

後にはあつけにとられて動けない雷助と、彼の横顔と戸口をせわしく見る老人が残された。

「……………いつもはあんなふうではないのだが……………
・ご老体、失礼仕った。幼子の所業と目をつぶってください」

「……………」

雷助は謝りはしたが、全面的に弟を信用していた。

“わしの知らんところで何かに気付いたか……………”

先ほどまでの“氣”の戦いはなかった。老人は何かを必死で考えていた。雷助は珍しく、それを黙ってみているだけだった。

「元!!」

風丸は彼に合図して、立たせた。そしてずかずかと歩き出した。人

の壁は彼の前にあえなく崩れていった。元と胡蝶は風丸についてい
くだけだった。

「お前、知っているんだろ？」

畦道の真ん中で風丸の足は止まっていた。

第十話 兄妹の両親

「・・・・・・・・・・・・・・・・??」

風丸は繰り返した。

「お前、知ってるんだろ!？」

「・・・・・・・・・・?お前・・・・・・・・」

「あの爺のやってる“呪い”の事だよ!」

元はパツと目を逸らした。胡蝶は首をかしげた。

「・・・・・・・・・・あの爺、俺と兄上の事でも何かほざいた様だな。なんと言っただ？」

「・・・・・・・・・・“近々、余所者が滅びをもってくる”と一昨日・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・元、お前は信じていなかった。そうだろ?」

元は草を弄びながら黙っていた。

「・・・・・・・・・・“呪い”に気づいていたわけだ」

「・・・・・・・・・・あの爺は・・・・・・・・・・“術”を使って・・・・・・・・俺たちの両親を殺しやがったんだ!」

胡蝶と風丸が同時に反応した。下のほうをさまよっていた視線が急に上がり、元を見た。風丸が先に言った。

「俺たち？」

元はめんどくさそうに視線を逸らし、山のほうを見やった。

「胡蝶は俺の妹だ」

胡蝶がようやく言葉を発した。

「・・・・・・・・・・“殺した”？」

「・・・・・・・・・・」

逸らした元の顔がぐっと険しくなった。胡蝶は何も言わない元の服を引っ張った。

「お兄ちゃん、どういうこと・・・・・・・・・・!? だって“お袋も親父も地震で死んだ”って・・・・・・・・・・!!」

「・・・・・・・・・・」

八年前

夕方の事である。家に彼の父親の姿が見えなかった。

「おとうは？」

「何か“山神様”に呼ばれたらしくて……」

「ふうん」

「元、胡蝶の面倒をしつかり見とくれ！！」

「ヤダね！」

元は家から飛び出した。が、飯時ということもあり、彼の遊び友達
は誰一人いなかった。

「ちえ。おとうもないし飯はまだだし……」

元はすぐ近くの山に登ることにした。

頂に立つと、夕日に赤く染まった村を見下ろす事になった。茜色の
屋根や畑に見入った元は、自らの腹の虫の音で我に返った。

“そろそろ帰るかな？”

と、眼下の村がざわざわと騒がしくなっているような気がした。

“……”

耳を澄ましても何も聞こえない。胸騒ぎを抑えられない元は、山を駆け下りた。

家に近づくと、子供の泣き声が聞こえてくる。一番聞きなれた声だ。

“胡蝶!?”

道の真ん中で胡蝶が大声で泣いていた。その頬や服に赤いものがべつたりと付いている。

「胡蝶!!大丈夫か!?’」

だが、どうやら何処も怪我をしていないようだ。

「おい、どうしたんだ!?’」

「おつかあが……!おつかあが……!」

「え!?’」

元は胡蝶を脇にやり、また走り出した。

「おつかあ!!’」

家に飛び込むと、血のおいが鼻をついた。

「!?’おとう……!?’」

暗がり立っているのは紛れもなく父親だったが、何かおかしかった。体中から発散されている禍々しい“気”に、元は後ずさった。

「……………おとう……………」

彼はゆらゆらと元のほうに歩いてきた。

その右手が光に照らされたとき、元は息をのんだ。

血の滴る刀が握られていたのだ。

その左手が光に照らされたとき。

元は体が動かなくなってしまった。

彼の母の生首がその手からぶら下がっていた。

第十一話 火縄銃

「お、おとう・・・・・・・・!!?」

「・・・・・・・・・・ガア!!!!」

元は彼の斬撃を危うくかわした。が、体勢を崩し、尻餅をついてしまった。その頭上で刀が再び光った。

「ウワア!!!!」

思うように動かない手足を駆使して、元は家の外に這い出た。そして、先ほど胡蝶を見たあたりまで駆けていった。

「胡蝶!!!!」

彼は妹の両肩を掴んだ。

「おい、何があった!?!」

「おとうが・・・・・・・・帰ってきて・・・・・・・・」

その時、胡蝶の目の中に恐怖が映ったのを元は見逃さなかった。

咄嗟に彼女を抱え、田んぼのほうに飛び込んだ。

ほぼ同時に刀が元の首のあった場所を通過した。

「ウガア!!!!!!」

父親の目は狂気に染まっていた。その目が田んぼに足を取られた兄妹を捕らえた。振り上げられた刀を見て、元は叫んだ。

「畜生！！！！！！」

そして、無意識に掴んだもの　　泥を彼の顔に投げつけた。それが見事に目に入った。

「グオ！？」

父親“だった物”が目をこすっている間に、元は胡蝶を抱えていないほうの腕で必死で泥をかき、反対側の畦道に這い出た。

「逃げるぞ！」

「・・・・・・・・・・」

胡蝶は腕の中でぐったりとしていて、自分で立てないようだ。

「・・・・・・・・・・糞オ・・・・・・・・！！」

完全に泥を拭いきった殺人者がこちらを向いた。

元は妹を乱暴に背負い、何とか村に向かって駆け出した。

彼は父親がゆっくりと歩いてくるのを感じていた。音がしたわけでも、振り返ったわけでもない。その体から放たれる禍々しい殺気に背筋が凍りついていただけだ。

「・・・・・・・・ゼエ、ゼエ」

元は無意識に自分の家に向かっていた。

たくさんの松明が家を取り囲んでいた。元は一番手前に顔見知りの男を見つけ、駆け寄った。

「松さん!!」

「ン・・・・・・・・？元！無事か!？」

「・・・・・・・・家中、見たの・・・・・・・・？」

「いや、俺は見てない。今呼ばれたばかりなんだ。山神様がここから、悪魔が出るといって・・・・・・・・」

「・・・・・・・・おとうだ」

「何？」

「・・・・・・・・おとうがおつかあを殺した・・・・・・・・」

「定が・・・・・・・・？」

家の戸口のあたりでなにやらざわめきが起こり、何人がが人の体を運び出してきた。元は胡蝶を地面に下ろし、一緒にうずくまってしまった。

「元、定吉は何処だ？」

二人が見上げると、木の上で老人がにたりと笑っていた。

「山神様！」

「・・・・・・・・多分、あっちのほうから・・・・・・・・」

老人は大きく頷くと、叫んだ。

「よし、皆の衆、“奴”はあちらから来る！準備をせい！」

そして“松”に言った。

「その二人はお前が連れて行け」

「・・・・・・・・はい！ほら、元、立て。胡蝶は俺が抱えていくから」

「う、うん・・・・・・・・」

元は松に連れられ、釈然としない顔で家に入っていった。

「・・・・・・・・泥だらけだな、ちょっと洗ってこい」

元は素直に立ち上がり、水桶に向かって一歩足を出した。

バシヤ。

元は床の血だまりに足を突っ込んでいた。その瞬間、元の頭が急速に回転した。

「松さん!!おとうは……おとうはどつなるんだ!？」

「……元、落ちて聞いて聞くんぞ……」

元は目を見開き、外に駆け出した。

その時、遠くのほうの雷のような音と、誰かの断末魔が響いた。

火薬の匂いが漂ってくる前に、元は全てを悟った。

第十二話 沈黙のわけ

「……………不可解、だな」

風丸は冷たく言った。

「何故、それで“呪い”に気付ける？ただの乱心とは……………」

元はいきり立ち、その胸倉を掴んで持ち上げた。それでも、風丸は何事も無いかのように彼を見ていた。

「……………どうした？言いたいことがあるなら言ったらどうだ？」

元は歯軋りしながらも、風丸を降ろした。

「……………親父が書いた日記に、親父がああ爺を疑っていたこと、確信を得た時の事の顛末、それに……………」

「それに？」

「親父が狂った日の前の日の所に書いてあったんだ。“明日、村人を惑わせし山神という名の詐欺師をこの場所より追放す”とな」

風丸はようやくやくニコリと笑った。

「有難う、余所者の俺にここまで話してくれて」

元は初めて見る風丸の笑顔に、ちよつと驚いた。

「……………なんだ、笑えんじゃねえか！」

「あん？」

「てか、お前が言うように仕向けたんだろ！」

「……………済まない。して、さっきの言葉は……………」

「てつきり、仏像かなんかみたいだな奴だと思ってたんだ！」

「……………仏像？」

「いや、全然表情が動かねえからさ……………」

風丸は吹き出した。元が首を傾げる。

「あれ？そんなにおかしいか……………胡蝶、お前もそう思っただろ？」

胡蝶はととつと風丸に近づき、その顔をぐつと覗き込んだ。驚いた彼の顔は笑顔ではなくなつたが、胡蝶はじつとその顔を見た後、兄を振り返つた。

「私は……………この人の笑つた顔、どつかで見たことあるよ！」

満面の笑みで振り向いた妹を見て、元は鼻で笑つた。

「夢にでも出てきたのか？生れる前からの許婚とか何とかいって」

風丸も胡蝶も顔が赤くなった。元はそれを見ない振りをして、天を仰いだ。

「で、風丸　　っていったっけ？合ってる？なら良かった
どうするんだ？」

「どつとは？」

「お前は“呪い”で少女を操っている糞爺を発見した」

元がごく小さい声で付け足した。

「……………あえて説明するなら、一目ぼれの、かな？」

「え？」

「ああ、気にすんな。この後、どう動く？」

「元、一つ教えてくれ。何故あの翁を今まで放っておいたんだ？」

「……………人質をとられていたからだ」

風丸は脇にいた少女を見やった。

「……………胡蝶、か」

「そつだ。あの爺、いきなりこいつを侍女に据えて、操り始めたんだ……………無言の警告だよ。“もし何かしたら貴様の妹は……………”

「……」つてな

胡蝶は口をすぼめて足で地面の石ころをいじくっていた。

「……そうか」

「聞かないんだな？何で止めなかったんだって」

「この村では絶対だろ？あの翁の言葉は」

元は口笛を吹いた。

「分かってるなあ！」

「……で、それが理由か？」

「まだある。あいつは曲りなりにも、この村の長だ。その長を殺したら俺も殺され、胡蝶がひとりになっちまう。それに……」

「まだあるのか」

元は首を傾げ、息を吐き出した。

「俺の力も足りなかった」

風丸は一瞬にして険しい顔になった。

「なら、もう、“神殺し”の障害はなくなったな」

元は笑みを浮かべ、頷いた。

風丸は向きを変え、村の集落に向かって歩き出した。

第十三話 光る稲妻

「……………どうされました？」

雷助は老人を観察していた。彼の目が戸や、雷助の刀、さらに自分の武器との距離を見ているのが手をとるように分かった。

「あ……………うむ……………」

「逃げますか？それとも戦う？」

雷助がせせら笑った。老人はたじろいだ。

「何をそんなに恐れているのですか？俺たちがあなたのいんちきを見破ること？」

「……………見える……………わしには見える……………
……………！」

彼は立ち上がり、血走った目で叫んだ。

「うぬらがわしを殺すのが見える!!！」

「ほう。因果応報という奴を受けるようだな」

「因果応報だと……………!!？」

雷助は刀を取り、ゆっくりと立ち上がった。翁が足をもつれさせながら慌てて離れる。

「風丸の言っていた“インチキ”が何かは知らんが……………」

雷助はしゃべりながら居合い術の構えをした。

「それ相応の行いがあるのだろうか？」

老人は奇声を上げて飛びのき、左手を突き出した。

それが破裂して、目もくらむ様な光と、地が震えるような音を出す。

「フハハハハ！！！！」

翁が刀を取り出し、一気に雷助に襲い掛かった。

ギン！！！！

が、受け止められる。

「な！？」

「生憎、こっちは火薬に慣れているんだ」

刀越しに雷助が笑う。

「……………抜いたからには後戻りは出来ないな」

山神の目に恐怖が宿った。彼は渾身の力で雷助を押し返すと、家から飛び出した。

「……………何なんだ??」

雷助は刀をいったん鞘に戻すと、ゆっくりその後を追った。

彼が外に出たとき。

「今じゃ!!!放て!!!」

バン!バン!ババン!!!

銃声が鳴り響いた。

風丸たち

「今のは!?!」

元が二人を振り返る。

風丸はあくまで冷静に言った。

「銃声、だな」

「雷助が!!!」

風丸は呟いた。

「危ないぞ……………」

「そんなの分かってる!!!助けに行くぞ!!!」

「ああ、銃を向けた奴らをな」

「あ????」

風丸は駆け出した。

“……………まずいな”

村

「馬鹿な!」

発射の瞬間、雷助が横に飛びのいた。それで弾は全て外れた。

「……………惜しかったな。いい作戦だった」

太陽の光が、彼の刀に反射して一番近くにいた村人の目をくらます。

“……………う……………” ザシユ!

「……………俺に向けたのが最大のミスだな」

その村人は真横に雷助がいることと、自分のわき腹から血と腸が流れていることを不思議そうに眺めた。

その体がゆっくりと倒れる。

ドサ……………

「……………その翁の指示とはいえ、考えが足りなかったな」

雷助はすぐ横の村人を見た。村人は震えながらも火縄銃を持ち上げ、雷助の目の前に構えた。

「来るなあ!!」

「……………撃ってみろよ」

「ウ……………!!」 バキ!!

刀が振り上げられ、銃がはじきとばされた。

「弾込めてねえ銃で何しようってんだ？」

雷助は冷たく笑い、刀を突き出した。

第十四話 雷神の怒り

喉から血を吹き出した村人が、がっくりと膝をつく。

「火縄銃は普通に撃つだけではただの足かせになりえる。覚えときな」

恐ろしい笑みを浮かべた雷助は、翁に向き直った。

「・・・・・・・・!!!!!!」

彼の顔を見た村人は、声を上げることも出来ず、逃げ出した。

二人の間に残っていた村人は、二、三步後ずさった。彼は蛇に睨まれた蛙。それ以上動くことが出来なかったのだ。

「どけ、命が惜しければ」

翁は叫んだ。

「馬鹿者!!! あいつを殺せ!!! 村に災厄を・・・・・・・・」

「俺は、殺されかけたから殺すだけだ。おっさん、どけ」

そう言いながら雷助は真っ直ぐ翁に向かって歩いていく。おびえて脇にどいた村人のそばを通ったその時。

「殺せ!!!」

翁の声が地から湧き上がるような太さになり、村人の目が狂った光を帯びた。

「ウガア！！！！！」

彼が大声を上げると、火縄銃を高々と掲げ、雷助の頭めがけて振り下ろした。

雷助は右腕でそれを受け止めたかと思うと、驚異的な力でそれを掴み、もぎ取るうとした。

だが、狂人の力は、それを上回っていた。

村人は釣竿を軽く振るような簡単さで銃を振り、それによって雷助は翁の家の壁に叩きつけられた。

「！！！！！」

雷助の手から刀が落ちた。

「ワツハツハツハ！！！！思い知ったか！！！！！」

翁が飛び上がって勝ち誇ると同時に、村人にかかっていた呪いが解けた。

「・・・・・・・・・・？」

彼は、雷助が壁の傍でゆらりと立ち上がるのを不思議そうに見ていた。

「まずい！！！！逃げる！！！！」

村人は声が何処から聞こえたのかと、きよろきよろ見渡した。そこで、山神の向こうから風丸が走ってくるのが見えた。

「・・・・・・・・・・？・・・・・・・・・・ド！！」

腹に当たった何か鈍い音を立てた。何が起こったのか分からないうちに、自分の足が力をなくし、地面に膝をついた。雷助の足元に口から液体がこぼれた。下に落ちたそれが赤いを見て、ようやく血であることに気がついた。

次の瞬間、脳天に衝撃が走り、彼の意識は、永遠に消え去った。

雷助は口から血を流し、荒い息をしていた。徒手空拳で打ち倒した村人を怒りのまなざしで一瞥した後、山神に向き直った。彼はへなへなと地面にへたり込んだ。

「ま、ま、待て！」

雷助が一步踏み出したのを見て、慌てた様子で片手を広げて見せたが、雷助は止まらない。

「兄上！！」

風丸が二人の間に立ちふさがった。雷助には弟の姿が見えていない。

「落ち着いてください！！皆殺しにするつもりですか!？」

山神は、風丸に遅れてやってきた二人組に気付いた。

「胡蝶!!」

先ほど、村人に術をかけたのと同じ声だ。風丸が山神を、元が胡蝶を振り返った。胡蝶はぴたっと直立不動になっている。目から、光が消えてしまった。

「胡蝶??」

元から、困惑が生れ、疑惑、そして怒りに変わった。

「この糞爺!!」

しかし、山神を黙らせる前に、彼は命令を下した。

「この三人を殺せ!!」

「元、逃げる!!」

風丸が叫ぶと同時に、胡蝶が小太刀を抜き払った。元は動かない。風丸が胡蝶を止めようと向きを変えたとき。

風丸は自分の刀が、脇をすり抜けた何者かに抜かれるのを感じた。

雷助は風丸の刀を逆手に持ったまま、一陣の風となり、山神に襲い掛かった。

雷助が猫のようにしなやかに着地した後、しばらくの間は誰も動か

なかった。

立っている者たちはただ、風すら止まった中で、首を切り落とされた老人が崩れ落ちるのをじっと見ていた。

雷助は刀の血を拭い、風丸に押し返した。

「……………兄上、何処で正気に??」

「……………すまぬ。あの翁があの子に呪いをかけたときだ」

彼は元に抱きかかえられている胡蝶をあごで指した。風丸は溜息をつく。

「あの翁が助けてくれたわけですね……………」

「おい、胡蝶！」

元が心配そうに彼女を揺さぶっている。

「ウ……………アレ……………?」

胡蝶が弱々しく呟いたが、どうやら大丈夫そうだ。三人はホッと溜息をついた。

「……………すまぬ。風丸」

「……………やりすぎですよ、兄上」

兄弟は転がった三つの死体に目をやった。その目には謝罪の気持がこもっていた。

「もう、この村にはいられまい……………」

「……………そうだな」

何故か元が頷いた。

「元？お前は……………」

「おいおい、よく考えてくれよ。俺たちや“神殺し”に加担したんだぜ？もうここにはいられねえよ」

「すまない……………」

雷助が頭を下げた。

「お、おい！そんなにすんなよ！あの爺は俺の敵だ。どうせ殺してたんだから同じことさ」

「元、ついてきてくれるのか？」

風丸は何処となく嬉しそうだった。雷助はにやりと笑った。

「良かったな風丸」

風丸が彼をにらみつけたが、彼はすでに風丸を見ていなかった。

第十五話

元の憂い

村を出て彼らは東に向かっていた。元が山神の家から“頂戴した”刀　風丸と雷助は気付いたが、元が持っているにはふさわしくない、かなりの名刀だった　を弄びながら、聞いた。

「それで、お前らは何処に向かっているんだ？」

元がただの好奇心で尋ねのだが、それによって兄弟は気付かされてしまった。

「……………元、ここはどこじゃ？」

「あん？」

「攻め込まれて、抜け穴を伝って逃げたのはいいが……………」

「自分の位置がわからなくて……………」

兄妹がやれやれと肩をすくめた。

「ここは、伊勢と近江の境だ。あの山の……………」

彼が村の向こうの山を指差した。

「てっぺん近くまで行くと、海が見える」

「ほう……………では、あっちが南だな？」

「なんだか知らないが、ご両人は何処に向かってるんだ？」

風丸が迷いも躊躇いもなく言った。

「岡崎城」

元は叫んだ。

「シロオ!？」

「岡崎………?おい、風丸………」

「狸は、確か堺にいたはず………父上の事を聞いたら、必ず岡崎まで退いてくるでしょう」

「途中で討たれていなければ、だがな」

「悪い知らせはもう十分です。狸を信じましょう」

二人のやり取りを見ていた元が呻いた。

「………お前ら、幾つだっけ？」

「?12だ」

「ふうん………あ、そう………」 “侍のガキはこんなのはっかなのか??これじゃ歯向かう気も起こらねえよ………”

「???’

「じゃあ、私と同じ」

胡蝶が嬉しそうに言った。

風丸と雷助　　つまり、超人的な身体能力とあらゆる戦いに精通している二人　　が行動をともにしていることから、数々の事件を書くのは時間の無駄だと思う。

彼らは夜盗に襲われたが、瞬時に全滅させたし、また、胡蝶をかどわかそうとした愚か者は、口に出せないような目に合わされた。風丸曰く、殺す価値がないから男を捨てさせたとの事。

三日後も、4人とも無傷だった。

様子がおかしいのは元だけである。

ほかの3人の後に、黙ったままついてくることが多くなっていた。

夜、見張りの元は薪の弾けるのを黙ってみていた。嫌な気配がして目が覚めた胡蝶は、兄の顔に変な“気”を感じた。

「……………」

「お兄ちゃん、どうしたの？」

「……………なんでもねえ」

「なんでもないなら、その顔は何よ？」

「……………悔しいんだ」

胡蝶はムクリと身を起こした。

「悔しい……………？」

「自分の力の無さが……………」

「それは……………二人と比べて？」

「そう……………俺はあまりに弱い……………」

「アハ、お兄ちゃん、可愛いね」

予想外の言葉に元はたじろいだ。

「何!？」

「弱いんだったら強くなないとね!頑張れ!」

「……………でも……………」

「お兄ちゃんならやれる！！信じてるから！」

元は嬉しそうに照れ笑いを浮かべた。

「そ、そうか？」

「うん！！！」

胡蝶は満面の笑顔だ。元はそわそわしながら言った。

「お、俺、小便行ってくるから、も、戻ってくるまで見張り、頼む
！！！」

元はバツと駆け出した。胡蝶は半ば呆れたように首を振った。

「起きてるんでしょ、二人とも」

「……………バレたか」

「お兄ちゃんも馬鹿よねえ……………勝てるわけ無いのに……………
……………」

「胡蝶、元はただ、“男”なだけだよ」

風丸がつばやいた。雷助もうなづく。

「？」

二人はちよつと微笑んで見せながら起き上がった。

「誰よりも強くありたいっていうのは自然なことだ」

「でも、大抵の奴は挫折する。自分より強いを見た瞬間に、ね」

「元は、自分には歯が立たない、化け物を二人も見たんだけ」

「それでも、誇りを捨てず、まだ自分が強くありたいと思ってる。だからあんな態度をとるんだ」

胡蝶はクスクス笑った。

「化け物って自分たちのこと？」

「そうだが？」

雷助は不思議そうに首をかしげた。

風丸は、笑いが止まらない胡蝶とその理由を訝る雷助に呆れ、パタツと倒れて寝てしまった。

第十六話 逃亡の終わり

“そろそろ、着くころなんだが……まずいな”

風丸は後ろの二人を振り返った。

元はあの夜の後、少しの間は意気揚々としていたが、疲労が影響して不機嫌に戻っている。

胡蝶は疲れているそぶりを見せないようにしているようだが、それでももう限界に近いのが分かる。

雷助が耳元でささやいた。

「風丸……そろそろ……」

「分かってます……」

獣道を歩き続け、この兄弟も相当まいっていた。

「……五日目、だからな……」

と、先を歩いていた二人が峠を超えた時。

目の前が開け、目指していた城がふもとに現れた。

「おお！元、見えたぞ！」

「ホントか!？」

元は疲れた顔を輝かせ、一気に駆け登ってきた。が、反対に胡蝶はしゃがみ込んでしまった。風丸がさっと駆け寄る。

元は城を見て、言葉を失ったようだ。

「……………随分、立派な城だな……………」

声が掠れている。

「まあ、それなり、だな」

雷がさらりと言う。元は口をあんぐり開け、彼の顔をまじまじ見た。

岡崎城は、1454年ごろ、守護代西郷氏が築城した城だ。

1531年に松平清康が改修拡張整備し、勢力を広げた。

明治の初めに廃城となったが、その当時の規模は東海地方で三番目だったらしい。

風丸が胡蝶をおぶって昇ってきた。

「兄上、行きましよう」

「……………」

元は妹をおぶりながら、軽々と山道を下る風丸にも、城と同じ位、驚いていた。

「止まれ！」

門番が槍を構えた。雷助は眉も動かさず、すぐ側まで歩いていった。

「なにやつ!？」

「残念ながら、貴様らに用はない」

雷助は槍の先を摘んだ。

「……この主にあるものを渡してほしいだけじゃ」

門番は槍を引っ込めようとしたが、全く動かない。

「……！」

「頼まれてくれるか？」

門番の一人 槍を捕まれている方 はさつとその顔を見つめた。

農民の、しかもほんの子供であるにも関わらず、一端の口を聞く。

「……何を渡せと言うのか……？」

しかも、よく見れば腰に立派な太刀をさしている。

少年はその太刀を外し、差し出した。

「これだ。後は主の指示に従ってくれ」

門番は、この少年を気に入った。従いたいとさえ思った。

「……分かった。ここで待っていてくれ」

「え？」

「……お前はここで見張っている」

彼は同僚にそう言い、踵を返した。

残された男は混乱したらしく、4人の顔を見渡した後、もう一度槍を引っ張った。だがしかし、やはり微動だにしなかった。

雷助は薄笑いを浮かべ、二本の指だけで彼の両腕から槍をもぎ取った。

「な!？」

「……もう少し鍛えた方が良さそうだな」

「兄上！」

「分かっている」

雷助は啞然としている門番に槍を投げ返した。

しばらくして、なにやら緊迫した表情の男が先ほど門番に渡した刀を持ってやってきた。

「おお！やはり無事じゃったか！」

雷助が嬉しそうに言うと、その男ははつとした表情で跪いた。

「その声は雷様ですか！？よくぞご無事で……」

「何じゃ、わしの顔も忘れたのか？」

「滅相もございません！ただ、お顔もお召し物も……」

雷助は納得したように自分の顔をなでた。

「ああ、これは風の意見じゃ」

「風さまも……??」

「無事じゃ。その、娘をおぶってるのが風丸。娘が胡蝶、もう一人

が元。……それより、何か、教えてくれ。わしらはとにかく逃げてきて、皆目見当がつかんのじゃ」

男は平伏した。

「は！その前に、お体を清められては？」

「……しかし……」

風丸がはじめて口を開いた。

「頼む。それから、胡蝶と元を休ませてやってほしいのだが」

「承知、仕りました」

時は天正10年。

六月十一日である。

第十七話 対談

「・・・・・・・・お前ら、何者だ？」

二人には幾度となく驚かされたが、それでも、この“お偉いさん”の態度には仰天だ。

「・・・・・・・・大したことはない。滅んだ家の一員に過ぎん」

「・・・・・・・・滅んだ・・・・・・・・？」

「さ、とりあえず汚れを流そう」

雷助はくるつと背を向けた。

その背が妙に寂しく見えた。

3人 胡蝶は別にされた 是体を清め、新しい服を着せられた。正装である。

「・・・・・・・・窮屈だな、おい」

「小さいのか？」

「いや、というより、なんとなく・・・・・・・・まあ、大丈夫だけど」

「じゃあ、元は休んでくれ。俺たちはちょっと話してくる」

「あ、ああ……………」

元はぼうつと、その小さく、そして、とてつもなく大きい背中を見やった。

兄弟が案内された部屋に入ると、下座に座った城主が、二人に平伏していた。

“……………”

二人は計ったように同時に、彼のさらに下座に腰を下ろす。

「……………雷助様？……………風丸様？」

「……………そう気を使わないでもらいたい。父上が亡くなつた今、私たちはただの一介の武士にも劣る身の上です」

「し、しかし……………」

男が狼狽している。風丸が思いついたようにいった。

「茶室はないんですかね？久しぶりに次郎三郎殿の立てた茶を飲ましていただけたらうれしいのですが……………」

「あ、では、こちらに……………」

次郎三郎があたふたと立ち上がった。

雷助は器を返した。

「・・・・・・・・父上は、死んだんですね？」

「・・・・・・・・ええ。十兵衛が突然裏切ったようです・・・・・・・・」

次郎三郎が器を受け取る。

「今、兵を出す準備を整えております。雷様、指揮をお任せしても？」

「いや、十兵衛は、恐らく猿の操り人形になっただけじゃ。それを討つても仕方ない」

「何ですと！？猿が・・・・・・・・！？」

「そう、討つべきは・・・・・・・・」

「お待ちください」

風丸が口を挟んだ。

「十兵衛に対する兵を挙げるべきです。どうなるかは別として」

「何？」

「恐らく、猿は信じられないほどの素早さで戻ってきて、十兵衛を討ちます。そのとき、次郎三郎殿が素知らぬ顔でこの城にとどまっ

ていては、怪しまれます」

「……………なるほど」

雷助が言った。

「それから、もう一つ」

「……………なんですかな？」

「もう、わしらが表に立つことはない」

「え？」

次郎三郎は、改めてこの双子の才の大きさを感じ取っていた。

特に雷助だ。風格が備わり、小さな体が何倍にも大きく見える。

風丸が静かに言った。

「家は滅んだ以上、私たちも死んだことにおけばよいでしょう。兄上も、私も、軍を率いる気は毛頭ありません」

「しかし……………」

「ただ」

雷助は彼の反論を覆い被せた。

「“復讐”のため、あなたの後ろに立って尽力するつもりでいる」

「・・・・・・・・それは、猿を・・・・・・・・？」

風丸が頭を振る。

「いえ。そんなことを望まれる父上ではありません」

「・・・・・・・・確かに・・・・・・・・それでは・・・・・・・・？」

「この乱世を鎮める・・・・・・・・これが、私たちの復讐・・・・・・・・
・この乱世が、唯一我らの敵です」

彼はむつつりと考え込んだ。自分がこの幼子たちを見誤っていたことは明白だった。

一刻ほど黙りこくった後、雷助が大あくびをした。

「ふあああゝ・・・・・・・・失礼。流石に疲れた。休ませてもらうても？」

「あ、では・・・・・・・・」

「兄上、先に行ってください。私はまだ話さなければならぬことがあるので」

雷助の目が一瞬きらりと光ったが、風丸はまるでそれに気付いていないかのようにお辞儀した。

“・・・・・・・・こいつ・・・・・・・・”

雷助は気になりながらも、おとなしく茶室を出て行った。

風丸はおとなしく座っているだけだった。次郎三郎はだんだん心配になってきている。

“この少年、何があっても動じないとは聞いていたが……”

あまりに、何もなさ過ぎる。

こつちを観察している様子もないし、何かを考えているわけでもなさそうだ。

ただ、畳の一点を見つめているだけだ。

「……………あの……………風丸様……………」

少年はようやく顔を上げた。

「風カザでよろしいですよ」

「……………風カザ様。お話というのは……………?」

「次郎三郎殿」

「はい」

「これは、憶測に過ぎませんが、少し、耳を傾けてもらいたい」

「・・・・・・・・・・は」

通称、次郎三郎。つまり、徳川家康その人は、さらに自分の見誤りに気付かされるのだ。

この日から七日前、本能寺に散った武将、織田信長と、その正室濃姫の間に生まれた唯一の子。

いや、唯一の子の片割れ、風丸。

その才覚は、家康をもってしても計り知れなかった。

そう、兄・雷助にも勝るとも劣らないものを、彼も持っていたのだ。

第十八話 風が導く真実

「この城にたどりつけたのはひとつの奇跡です」

風丸が呟いた。次郎三郎……家康は、それに同意する。

「は。ご兄弟がこちらに……」

「私たちのことではない」

「は？」

「次郎三郎殿のことです」

この瞬間、家康は全身の毛が逆立ったかのように感じた。

「わ、私、ですか？」

じっとりとした汗が体中から出てくる。風丸が刀を持っていないにもかかわらず、斬られるような心地がした。

「ええ。堺にいらつしゃったのでしょうか？普通でしたら、確実に討たれているところですよ」

「……親方様の後を追うことも考えましたが、服部の言葉で伊賀を超えることに……」

「なるほど」

家康は少し肩を動かした。

「……………どうされました？」

「いえ、何でもありません」

「……………」

風丸は家康の顔をじっと見つめたまま、口をつぐんだ。

家康は痺れを切らした。

「風様、出来れば、風様の“憶測”を聞かせていただきたいのですが……………」

「……………貴方は、猿の計略を知っていましたね？」

あまりのことに、一瞬家康の思考は止まった。

「……………は？」

「いや、むしろ、一枚噛んでいるはずだ」

「そのような……………」

「まあ、聞いていてください。猿、十兵衛、貴方で共謀し、一人……………この場合十兵衛が織田信長を討つ。そしてもう一人が敵を討つというお題目でそのものと戦をし、勝つ。そうすれば、勝った

もの手の中に天下が転がり込んでくる……………」

家康は冷笑していた。

「……………風様、それでは……………」

「討たれたものが損をするだけと？」

家康は、唇の端を吊り上げたまま頷いた。

「そこで貴方の出番です、次郎三郎殿。討たれた振りをした十兵衛を貴方が匿うのです。そうして、猿が天下を取った後、恩恵を賜れば、少なくとも、貴方は損をしない」

家康の顔から笑いがなくなっている。

「……………しかし、仮にそうだとして 仮に、ですぞ

我らが組む理由がないではありませんか」

「あります。猿は天下人になることを切望している。予防の実現のためならこのくらいのことにはやるでしょう。そして十兵衛が父上に恨みを抱いていることは周知の事実。多少の汚れ役になることでそれが晴らせ、後ろ盾もつかめるとなればたやすく 貴方の手に乗ってくる」

先ほど感じた恐怖が蘇ってくる。家康はちらりと天井を見やった。

「……………して……………私がその計略に乗る理由は……………」

「乗ったのではないでしょう。これは、貴方の計略です。貴方は、猿や十兵衛に汚れ役をやらせ、最後の最後で天下を掠め取る気にいるんでしょう」

「・・・・・・・・何を根拠として・・・・・・・・」

風丸は初めて笑った。それは年相応の（皆さんお忘れだとは思いますが、この少年はたったの12歳なのである）明るい、そう、青空を思わせるような快活な笑い声だった。

「いったでしょう？ただの推測だと」

家康は黙った。表情は暗く、硬い。視線は畳の上をさまよっていた。風丸の明るい声がする。

「ただ、貴方の反応で、これが嘘ではないことがはっきりしましたね」

家康はさっと彼を睨みつけると、拳で畳をたたき、天井裏の刺客に合図を送った。

次の瞬間、刺客は天井から苦内くないを風丸に放った。

まったくの無音だったため、風丸に気付くすべはない。

苦内は風丸の頭蓋に突き刺さり、致命傷を負わせた・・・・・・・・

筈だった。

風丸は家康を正視したまま、苦内を払いのけるような仕草を見せた。

家康に見えたのはそれだけである。

気付くと、風丸に背後に回りこまれ、苦内のとがった先端が首筋に当てられていた。

「……………出てきてもらおうか」

冷たい声だった。

天井裏の刺客は、敗北に愕然としながらも、俊敏に姿を現した。先ほど、雷助が太刀を渡した門番だ。鎧を脱ぎ、普通の服を着ていた。

「……………俺の飛苦無とびくぬいをつかむとは……………童わっぱや
るなあ」

「……………次郎三郎殿なら、伊賀の者にやらせるだろうと思つていた。そなたたちは一撃で相手を倒すため、自然と攻撃の型的に限られてくるというだけだ」

彼は感心のあまり、言葉を失ってしまったようだ。家康はすっかり狼狽していた。

「……………か、風様、申し訳……………」

風丸はすつと彼から離れた。

「私は貴方を恨んではない。敵を討つ気はないとさっき申したばかりでしょう」

「は、はい……………!」

「兄上は気付いていないようです。もし、知られたら、それこそ貴方の命はありません。お気をつけ下さい」

家康は平伏した。風丸はぷいっと伊賀者に向き直り、苦内を投げ返した。

「では、私も、ご厚意に甘えて休ませていただくことにします……………
……………それでは」

茶室に残された二人は、しばし、呆然としていた。

「……………親方様。あの餓鬼はいつたい……………」

「織田信長公が正室濃姫との間に設けた唯二の子だ」

「唯……………二？」

「あの双子の兄も負けずに才気あふれておる」

「……………ほう」

彼は興味深げに風丸が出て行った戸口のあたりに目をやった。

彼は服部正就^{はつとりまさなり}。有名な伊賀忍者、服部平蔵の長男である。このとき、17歳。身体能力や、苦内の扱いなどは父をはるかに凌駕していたが、まだ未熟な面もある。

恐らく、平蔵がこの場にいれば、気付かないはずがなかったが、彼は茶室からの声が聞こえる範囲に、12歳の少年がずっと隠れていたことに、まるで気付かなかった。

第十九話

別れ

風丸は、兄にまったく気付かなかったかのように振舞った。

雷助も、弟に気付かれたことを知らないかのように振舞った。

風丸は次郎三郎の部下に案内されるままに、一つの部屋に入った。

「・・・・・・・・・・？」

部屋の中にどこかの姫君らしき少女が座っている。

「どうされました？」

「あの姫君は・・・・・・・・・・？」

「風丸！！」

姫がうれしそうに振り向いた。

「！？胡蝶！？」

「遅かったね！」

「あ、ああ・・・・・・・・元は？」

「寝ちゃった。風丸も帰ってきたし、私も寝ようかな・・・・・・・・」

「
胡蝶はとても眠そうに“ふわああ”とあくびをした。途端に眠気が風丸に伝染する。

「俺も……………寝……………よ……………」

風丸はゆっくりと腰を下ろし、ぱたりと横に倒れた。

「……………風丸??」

従者が彼の顔を覗き込む。

「……………お休みになったようですね」

「……………よく分かんないな、風丸は」

「お運びいたしますか?」

「え、あ、お願いします」

12歳の少女にお辞儀をする従者の姿は、胡蝶の目にはとても奇妙に見えた。

雷助の炎は燃え上がっていた。

ただ、まだわずかに冷静さが残っていたため、家康を急襲するような行動にはいたっていない。

“次郎三郎を討つても仕方あるまい。だが……このまま
奴の思い通りにさせることは……!!”

風丸が家とか、父の仇などという小さなことに無関心なのは知っている。そう、そういったものが小さいものであることも、知っている。

だが、だからといって、雷助は我慢がならなかった。

“……おそろく、こういうところが風丸と違っているの
だろう……俺もやはり、ただの人に過ぎんな”

雷助はしかめっ面のまま、すくつと立った。

“……” “乱世に対する復讐”は風丸に任そう。あいつ一
人で十分だ”

雷助は、弟が自分より優れていることにとうに気付いている。自分
がいなければ、風丸は存分に才を発揮してくれるだろうという風に
考えているのだ。

“俺は……” “小さいこと”にこだわらせてもらおう”

雷助は思案をやめ、布団に向かった。彼の頼みで、ほかの3人とは
違う部屋に寝床が準備されていた。

風丸は明け方近くに目を覚ました。元と胡蝶との三人で川の字を作っている。

“……………?”

眠気でぼんやりした頭の奥底で、“嫌な予感”が鋭く風丸を突き刺した。

“……………兄上……………?”

途端に頭がさえてきた。

布団を跳ね除け、飛び起きる。横の二人がもそもぞ動いてもお構いなしで障子を開け放った。

“……………まさか……………!”

全速力で門まで走ると、案の定旅支度を整えた雷助の後姿が見えた。

「兄上!!!!!!」

雷助はぱたりと足を止めた。

「どちらへ行かれるつもりですか!?!」

彼はゆっくりと顔を向ける。

「……………お前は、お前の復讐をやり遂げる。俺は、狸や猿

に一矢報いる」

「兄上、そうしても……………」

当然、弟の言いたいことは分かる。“何にもならない”“両親は帰ってこない”。雷助はそれをさえぎった。

「風！」

「……………はい」

「分かっているだろう。俺とお前は、一緒な様で、やはり違う」

「……………はい」

「お前の方が、よほど俺より賢く、強く、優れている」

「そんな……………！」

「いや、そうだ。さもなくば、乱世を鎮めるなどという大仕事を任せられないだろ」

風丸は黙って兄を見ている。

「……………いつか、また、戦場であいまみえるかもな。お前が狸を影から支えるのであれば……………」

雷助は“敵として”とは言わなかった。ただ、風丸には十分すぎるほど伝わっていた。

「……………その時は、容赦はしません」

雷助は笑った。

「それでこそわが弟だ。俺も、お前に斬られるまでは生きていますもりだ」

「でも……………!!」

「達者でな」

雷助はすたすたと歩き出す。昇り始めた太陽が、完全に雷助と重なり、風丸の目をくらました。

こうして、兄と弟は別れたのだった。

天正十年六月十二日。

既に羽柴軍は明智軍に襲い掛からんとする勢いを見せていた。

第二十話

風と蝶

風丸は、しばらく兄の背中を見つめていたが、すぐに向きを変えて城の中に入った。

“……………”

「風丸!!」

元だった。

「……………元。何だ？その格好は」

元は少ない荷物をまとめ、腰に刀を下げて騒がしく走ってきていた。

「決まっている！俺は雷助についていく！」

「……………兄者に……………？」

「そつだ！あいつ、出て行っただろ!？」

「……………胡蝶はどうする？」

「お前がいる！」

「……………何故兄者に……………？」

「俺は戦場で手柄を立てる男！お前とは違つ!!」

風丸は冷たい目で元を見た。

「なるほど。ならば、未来にお前の生きる場所はないな」

「何!？」

風丸は逆上した元を一瞥したあと、すぐに目をそらした。

「……………兄者は東に向かった。厩で馬を二頭借りて後を追え。そうすればすぐにでも追いつける」

元はもやもやした苛立ちが自分の中に満ちている気がした。

「……………いちいち腹の立つ野郎だ……………!!」

「何のことだ？」

珍しく、風丸の口調に感情があった。苦々しさという感情が。

「知るか!腹立たしいってただけだ!!!」

「……………早く消える。お前はいちいち目障りだ」

元は怒りで頭が真っ白になった。が、風丸は全く興味がないようでするりと脇を通り抜けた。

「待て、風丸!」

元は刀に手をかけていた。風丸は背を向けたまま、その気配を感じ取っていた。

「……………戦場で合い間見えたとき、しっかり相手をしてやる。今はそれより兄者を追え。命は捨てるもんじゃない」

「……………俺は丸腰のお前にも勝てないと言っのか!？」

「そつだ。少なくとも、今の元では、な」

「……………クソオ……………!!!!」

元は強く刀を握り締める。

風丸はちらりと彼を見た後、そのまま歩いていった。元は刀を抜くことも出来ず、その後姿を見送った。

「……………畜生……………!」

元は低く唸った後、厩に向かった。

ほんの一刻後、一頭の馬に乗った元が、もう一頭を引き連れて門をくぐって行った。彼が振り返ることはなかった。

風丸は胡蝶を揺り起こした。

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・？」

「胡蝶、元と兄者が出て行った」

「・・・・・・・・え・・・・・・・・？」

胡蝶はガバツと身を起こす。

「出て行った・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・兄者は、どうしても両親の仇を取りたいらしい。元はそれについて行ってしまった・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

胡蝶はじっと風丸を見つめた。一呼吸おいて、風丸がそれに気づく。彼は目をそらしながら呟いた。

「・・・・・・・・どうしたの？」

「・・・・・・・・風丸も行きかけたの？」

「え？」

驚いて顔を上げると、胡蝶が静かな目で覗き込んでいた。

居心地が悪くなるほど静かな目。風丸は再び目をそらした。

「・・・・・・・・でも、そんなことをしても・・・・・・・・」

「そうじゃなくて、風丸はどうしたいの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・父上、母上の仇を取りたい・・・・・・・・・・！」

「なら・・・・・・・・・・」

「でも！」

風丸は胡蝶をさえぎった。

「・・・・・・・・・・それでも、父上は帰ってこない！！！」

「・・・・・・・・・・」

「俺達は前に進まなきゃいけないんだ・・・・・・・・・・！」

風丸は拳を握り締める。

「風丸・・・・・・・・・・」

胡蝶が彼の拳ににそつと手を当てると、風丸ははつと顔を上げた。

「・・・・・・・・・・大丈夫」

胡蝶は風丸に身を寄せた。

この光景は、この先ずっと続くこととなる。

風丸は、ずっと誰かを支えてきた。

そしてこの先も支えていく。

それは、風丸が生きているかぎり、ずっと続く。

追い風のごとく、静かに、さりげなく、あらゆる人々の背中を押し
ていくのだ。

そんな彼を、胡蝶は生ある限り支えていく。

・
・
静かに吹き抜ける風が、凧に、嵐に、変わらないように……

第二十一話

そして男は風を纏う

次郎三郎こと徳川家康は軍備を整える指示を臣下に出していた。

そこに顔つきが急に引き締まった風丸が現れた。

「風様かき！！」

が、次郎三郎が頭を下げる前に風丸が跪いた。

「親方様、出来れば私わたくしに戦の展望をお聞かせください」

家康は面食らって彼を見ていた。

これは、風丸が家康の臣下であるということを皆に知らせる行為だった。

「……………面を、上げよ」

風丸は命令に従った。

「皆、下がれ。私は風丸殿と話さねばならない」

家康の臣下が皆いなくなっても、風丸は跪いたままだった。

「……………何の真似ですか？風様」

「親方様、私は貴方様の僕にございます」

家康は明らかに戸惑っていた。

「……………良いのですか？」

風丸の目が油断なく光った。

「一つ、お願いがあります」

一瞬、無茶な事を言われはすまいかと疑った家康だが、相手が風丸であることで結局は頷いた。

「なんなりと」

「あらゆることについて、私の口出しを許していただきたいのです。僭越な行いだとは思っておりますが、必ずや、お役に立てるはずですよ」

家康はしばらく風丸の顔を見つめた後、信じることにした。彼を、彼の血を。

「……………相分かりました」

そして、この天下盗りの戦の展望を説明しだした。

「……………つまり、あなたは御三方でお考えになった謀

略のとおりに行動すると?」

風丸はあっさりまとめた。多少面食らった家康だが、すぐに頷いた。

「しばらくの間は、です。今の私には、猿を倒す大義名分がない」

「恐らく、それが正解です。ただ、間違いなく十兵衛は殺されるでしょう」

「猿に、ですか?」

「いや……………兄上입니다」

根拠はないが、確信があつた。

雷助は、必ずや十兵衛をその手にかける。

「雷様が?」

「失礼、言いそびれていました。兄上と元が、出て行ってしまったのです」

「何ですと!? 何故でございますか!?」

「昨日の私たちの会話を聞いていたからです。良いですか、次郎三郎殿」

風丸と家康はこの時だけ、昨日までの関係に戻った。

「これから先、一瞬たりとも油断してはいけませんよ。恐らく兄上

は、父に直接手を下した十兵衛を殺した後で、発案者の貴方を討ちに来ます」

「なんと・・・・・・・・！！！」

家康は自分の顔が青ざめるのが分かった。自分でも驚くほど深い恐怖が、内からわき上がってきたのだ。

「・・・・・・・・・・貴方を殺すか、自分が死ぬまで、兄上はやめないでしょう」

風丸は暗い眼をしていた。

一方、家康は脇の下にじっとりとした汗をかいていた。そのいやな感触を拭きたいがために、彼は訊ねた。

「しかし、風様。雷様は猿を狙わないとおっしゃるのですか？」

「・・・・・・・・・・猿は放っておいても自分の身を滅ぼすでしょう。結局のところ、猿も貴方に利用されているに過ぎない」

「・・・・・・・・・・？」

家康には、その言葉の本当の意味は分かりかねた。

実のところ、家康は風丸が考えたより愚かで、単純な考えしかもっていなかったのだ。

第二十二話

走る稲妻

そして、羽柴秀吉軍と、明智光秀軍は激突した。

光秀にとっては、これは芝居だった。天下を盗る大芝居とはいえ、芝居でしかなかった。

が、秀吉にとって、これこそが天下取りの戦だった。

“織田信長公が倒れた今、その仇を討つたものが天下を握れる。恐らくこれが、戦国史上最も重要な戦だ”

彼はそう思っていた。

家康がこの計略を持ち込んできた時。秀吉は確信した。

自分こそが天下を統一すべく生まれてきた男なのだ、と。

例え、戦で信長、家康にかなわないとしても、知略で勝つのは自分だ、と。

実際、彼はこの後の戦いで、家康に見事に敗北する。しかし、戦いに負けても、勝負は秀吉が勝った。

家康が助けようとした信長の子、信雄を降伏させ、家康の大義名分を奪うといった搦め手からの攻撃で、彼は勝った。

そして家康をあの手この手で説得し、ついには臣従させることに成功。天下人への道を確認たるものにしていく。

その秀吉と今、敵として対面している明智光秀には、勝機など最初からなかったのかもしれない。

光秀は予想をはるかに超えた速さで接近してきた秀吉に驚いた。が、それでもまだ、家康の計略通りなのだと思込んでいた。恐らく、信長を討ったという達成感が、彼の頭脳を狂わせたのだ。

急いで軍勢を整え、秀吉軍に立ち向かったものの、光秀軍は明らかに浮き足立っていた。

どの時点で彼が秀吉の計略に気づいたかは、誰にも分からない。ただ、明智光秀はこの戦いで完全なる敗北を喫する。

俗に言う、三日天下。彼が天下人であったのは、たったの11日間だった。

彼はほうぼうの体で逃げることとなる。

そして光秀は、この大芝居の筋書きを書いた男、家康のところへ逃げ延びようとしていた……………

ガサガサ……………ガサガサ……………

「糞！猿め！」

「殿、こちらに……………」

闇の間を滑らかに動く影があった。そのあたりの落ち武者狩りの農民達は、こんなところにいるわけがないと高をくくっているところがあった。それで彼らは、逃げられるのではないかという、淡い希望を抱くことが出来た。

が、その時、声がした。

「惨めなものだな、十兵衛」

武士達は筋肉を硬直させ、身構えた。主の光秀を守るように円形に固まって。

「だ、誰だ！？」

ガサガサ……………ガサガサ……………

「情けだ。惨めに、竹槍に貫かれて死ぬより……………」
この俺に斬られた方が良いだろう？」

光秀は直感的に上を見上げた。樹上に、抜き身の刀を担いだ少年が立っている。

それが誰なのか一目で分かった光秀は、驚愕のあまり、声を失う。

「……………久しぶりだな、十兵衛」

雷助は光秀の顔目掛けて飛び降りた。まだ固まっていた光秀はそれをかわせず、妙に潰れたうめき声だけ立てて倒れる。

「殿!？」

振り向いた従者達も、次の瞬間には斬り伏せられる。見事というしかない雷助の斬撃は、彼らの命をことごとく奪っていた。

雷助は血まみれの刀を、憎き仇に突きつけた。地べたに座り込んだ光秀は鼻血を拭いもせず、おびえた目で雷助を見上げている。

「……………ら、雷様……………」

「命乞いか？薄汚い裏切り者の貴様には、良く似合う行為だな」

雷助は冷たくあざ笑った。

「お許しください……………!私は次郎三郎殿に唆されて……………」

光秀は雷助の氷よりも冷たい目を見て、恐れおののいた。何よりも明確な死刑宣告。雷助の声は、光秀が今まで聞いたどんな声よりも冷たく、恐ろしかった。

「死がそんなに怖いか、十兵衛」

雷助は刀を振り上げた。それが、月明かりに一瞬きらめく。彼はあらん限りに侮蔑をこめて言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・存分に味わうが良い・・・・・・・・・・・・・・・・！」

シュツ

・・・・・・・・・・・・・・・・ドシャ

雷助は表情を変えないまま、刀身の血を手ぬぐいで拭き取り、刀を納める。

そして、地面に転がった、光秀の頭を一瞥した後、闇にとけるように姿を消した。

真夏の夜だった。

第二十三話

神を名乗るもの

本能寺の変から、二年が経った。雷助も、家康（むしろ風丸と言った方がいいかもしれない）も、秀吉と天下を争って、徹底的に戦おうとはしなかった。

家康は着々と自分の足元を固め、雷助は確実に息を潜めていた。

家康と秀吉の戦いも、風丸がいらんだとおりの結末を迎えた。つまり、彼の兄、織田信雄が秀吉に早々と屈し、家康が大義名分をなくす、というものだ。家康は心底驚いて風丸と話していた。彼はすらりと背が伸びており、もうすでに元服も終わっていた。

「……………驚きましたな、流石は風様」

「……………残念です」

風丸は心底悔しそうだった。まるで、雷助が乗り移ったかのような苦々しさがそこにはあった。しかし、彼はすぐにいつもの表情に戻った。

「それより、よろしいですか？」

「風様こそ、よろしいのですか？」

家康は風丸の顔をうかがったが、彼は静かに微笑んでいるだけだった。

「……心配なく。於義丸様は私がお守りいたします」

「あんなやつのごとはどうでもいい！」

家康は口調を荒げた。

「問題はあなたですぞ！猿が風様だと気付いたら……」

「どうでもいいことです。於義丸様の安否に比べれば、ですがね」

風丸は冷たくさえぎると、頭も下げずに、立ち上がった。そして、家康を残し、茶室から出て行った。家康は不機嫌に鼻を鳴らした。

於義丸とは、家康の次男だ。嫡男信康が十年前に切腹させられており、家康の跡継ぎとなるはずの人物である。しかし、家康は彼を毛嫌いしており、今回の秀吉との講和で彼を、人質として養子に出してしまったのだ。風丸はこの際、彼の従者として秀吉の元に上ることになった。於義丸は元服した後、「羽柴秀康」を名乗り、非常に有能な人物として知られる。しかし、このときは数えで弱冠十一歳。さて、風丸はその於義丸と対面していた。

「面を上げよ」

流石にまだ子供であったが、将来頭角を現すだけの才は感じさせる少年だった。

「は！」

於義丸は風丸を上から下までじっくりと見た。

「そうか、貴様が父上の“お気に入り”か」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

風丸が黙っていると、彼は寂しげにつぶやいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・多少、ねたましく思っていたのじゃが。しかし、お主を見てなんとなく分かった気がする」

於義丸はそう言いつつも、大きなため息をついた。珍しく、風丸は感心したような表情になる。

「・・・・・・・・流石、親方様のご子息であられますな。私を恨んでもおかしくないでしょうに・・・・・・・・」

「おだてるな。その父から捨てられた、ただの人質だ。それについてくるとは、おぬしも変わり者じゃのう？」

風丸は頭を下げたが、余計なことは何も言わなかった。於義丸は何も疑わず、部屋を出て行った。残ったのは、その昔からの従者だった。当然、風丸の素性は知らない。そもそも、彼ら双子は本当に一握りの人間しか知らない、隠し子であった。

「お主は一体、何者なのじゃ？」

従者は不機嫌な顔で尋ねた。

「どうやら、親方様がどこか拾ってきたらしいが、それにしても異例な待遇。不審極まりない」

「申し訳ございませぬ。ただ、素性については親方様より、決して明かしてはならぬと命じられております。なにとぞご勘弁を……」

風丸はまたしても深々と平伏した。従者は鼻を鳴らした。彼は風丸を、家康がどこかの娘　　彼は“下賤な者”という表現を使つたに生ませた隠し子だと思つていた。

(一応世話はするが、抜擢することはないだろう)

そう考えていた。それで非常に尊大に言つた。

「………まあいいだろう。くれぐれも、粗相がないようにな！」

直後、従者は得体の知れない恐怖を感じた。それは命を危険にさらしたものが必ず感じる、死への直感だった。しかし、それは融けるように消えた。

「相分かりました」

風丸は静かに言つた。従者はその恐怖の大本が、彼だとはまったく気付かなかつた。

ところで、風丸は元服して、“織田風伯”という名を持っていたが、これを知っているのは家康だけであつた。公となっている名が“松平風康”だつた。この松平姓を受けていることは、家康との親戚となつていることの現われであつたから、真相を知らぬものにとつては、確かに破格の扱いに見えた。

とはいえ、この時期に秀吉側に送られるとなつては、これはまるで手のひらをひっくり返したような冷遇である。それで従者は風丸を侮ったのだらう。

雷助は当然のことながら、風丸もまた、父、信長の血を受け継いでいた。

静かな口調や立ち振る舞いの下、皮一枚奥には、激しい怒りが燃え盛っていたのだ。

それは“あの日”の炎のように、彼の内側を焦がした。

第二十四話

胡蝶の舞

さて、秀康こと於義丸は、秀吉の元へと出発した。先に書いたとおり、風丸もそれについていった。馬で駆けていく一行に、いるべきでないものが一人、紛れ込んでいた。その者は、笠を深くかぶり、ピタリと風丸の後ろを駆けている。於義丸はその見事な馬術を横目で見ると、ぷつと吹き出した。

「流石、城下一のじゃじゃ馬といわれるだけあるな！」

と、その者が馬をぱつと跳ねさせ、一步で於義丸の横についた。

「……於義丸様？」

於義丸は母親に怒られたようにびくつと身を引いた。それで手綱が引かれ、馬は急に止まった。於義丸は振り落とされそうになるのを馬上で必死にこらえた。

一向は同じように急停止し、ほとんどが体を大きく揺らした。優雅に止まったのは、風丸と、その「怪しいもの」だけだった。

何とか体勢を整えた例の従者が、馬上で刀を抜いて怒鳴った。

「無礼者！！」

「無礼者お！？」

彼は笠を放り投げるように取った。「彼」ではなかった。
彼女は怒りもあらわに従者をにらみつけた。

「私は何にもしちやいないでしょ！この狐！」

「き、キツネえ……！？お主、誰じゃ！？名を名乗れえ！！」

彼女はすつと背筋を伸ばした。少女は、怒り狂っていた従者でさえ、はつとするような美しさを持っていた。彼女はむっとしたように答えた。

「胡蝶」

それは胡蝶だった。於義丸が言った“城下一のじゃじゃ馬”である。加えて、その美貌も城下一との噂があった。

胡蝶が名乗ってから、間抜けな間があった。それはキツネが胡蝶に見とれていた時間である。彼は頭を振って邪念を追い払おうとした。

「……胡蝶とやら！何故そなたがこの一行に加わっておる！？正直に申せ！」

と、彼の足元から声がした。

「胡蝶は我が妻にございます」

風丸だった。彼は馬を止めた後すぐ、飛び降りて於義丸の馬を落ちて着かせに行ったのだった。従者は憤怒の表情で彼を見下げた。

「そちの妻は無礼だ！何故連れてきた！？」

風丸はにこりと笑った。

「傍にいないと何をしでかすか分かりませんので。失礼仕りました、キツネ殿」

於義丸はまたしても吹き出した。また、他の者も何とか笑いをこらえている雰囲気伝わってきた。ただ一人、キツネだけが、抜き身の刀を握り締め、ぶるぶる震えている。

「貴様……!!」

「胡蝶姉さん」

於義丸はキツネを無視して胡蝶に話しかけた（実は於義丸と胡蝶は仲が良い。風丸と於義丸がはじめて会った前回より、さらに前、幼年の於義丸の遊び相手として胡蝶が選ばれたのだ。於義丸も胡蝶も、お互いを実の姉弟のように思っていた）。

「どうして“キツネ”なんですか？」

胡蝶はニヤツと笑った。

「虎おんまろの威を借る狐」

これにはキツネ以外が全員吹き出した。一方キツネは、本気で怒っていた。

「この無礼者……!!」

「刀をしまった方がいいぞ」

於義丸は涙を拭きながら言った。

「命を無駄にするもんじゃない」

キツネは怒りと戸惑いでピタリと動きを止めた。於義丸は笑いながらも、冷たく言った。

「刀をしまえ」

主の命令には逆らえず、彼は悔しそうに刀を納めた。

於義丸はひょいと正面にいる風丸を見た。風丸は苦笑いを浮かべて彼を見上げていた。

「……もう少しで斬りかかっていましたね、キツネは」

風丸が彼だけに聞こえるように囁くと、彼はにやりと笑った。

「……そしてキツネの首が飛んでいた、そうだろうか？」

風丸は肩をすくめ、脇にどいた。於義丸はクスクス笑いながら馬を進め始めた。

「胡蝶！」

言いながら風丸は馬にひらりとまたがった。胡蝶はすぐにその横に馬を寄せる。

「何でしょうか、ご主人様？」

風丸は胡蝶の冗談めいた言葉には取り合わず、たしなめるように言った。

「あんまり、無茶しないでくれよ。もう少しで斬られていたぞ」

「あら。風丸はそれを待ってるんじゃないの？」

「はあ？」

「ほら、そうすれば、あの人を切る理由が出来るから……」

風丸は胡蝶が放り投げた笠でその頭を叩いた。

「イタ!!」

「阿呆」

風丸は笠を胡蝶に押し付けると、さっさと馬を進めてしまった。

胡蝶はしばらく、ぷつと頬を膨らませていたが、すぐにニコツと笑顔になり、それを追いかけ始めた。

第二十五話

使者

あと半日ほどで秀吉の下につくという時分、一行は道の前のほうに、侍が待ち構えているのに気付いた。

「……於義丸様……」

「風兄！」

「は！」

いつの間にか、於義丸は風丸をそう呼ぶようになっていた。

「何者が確かめてきてくれ」

「かしこまりました」

風丸は馬を駆けさせ、その男の傍にいくと、ぱっと飛び降りた。

「失礼。そこで何をなさっているのですか？」

男は風丸を一瞥すると、すっと背筋を伸ばし、見下すような姿勢を作った。

「……於義丸殿のご一行とお見受けするが、いかがか」

風丸は目を細めた。使者にしては高圧的過ぎる。

「……………あなたは？」

「羽柴秀吉の使いだ」

男は無愛想に答える。風丸はさらに眉をひそめた。

「申し訳ないが、あなたは甚だ疑わしい。本当に使者なら、そのような無礼な振る舞いは慎むべきではありませんか？」

「なんだと!？」

「……………貴方の言うとおり、私たちは徳川次郎三郎家康がご子息、於義丸様の一行。そして今、羽柴秀吉殿のもとに参じる途中。於義丸様のお命を狙う輩が出てきてもおかしくはないかと……………」

「無礼なツ!!」

激昂した男は、刀に手をかけた。反射的に風丸も刀を抜きかけたその時。

「貞隆! 待て!!!」

一人の武士が飛び出した。刀に手をかけた二人はそこでピタリと止まる。飛び出した男は、風丸に一礼した。

「失礼いたしました。私は片桐且元と申します。こちらは、弟の貞隆」

風丸も貞隆も、ピクリとも動かない。且元はにらみ合っている二人

を（実際「睨んでいる」のは貞隆だけだ。風丸は「見ている」だけで、何の感情もこめていない）、交互に見た。

「……信じていただけぬとは思いますが……」

風丸は遮った。

「いえ、片桐様の華々しいご武勲は何度も耳にしたことがあります」

ところで、片桐且元の武勇伝は現代にも伝えられている。この物語においては触れなかったが、天正十一年五月に、織田信長の後継者を争う戦があった。戦ったのは羽柴秀吉と、柴田勝家。

世に言う「賤ヶ岳の戦い」である。

その戦いで且元は、猛将として名高い福島正則や加藤清正とともに、「賤ヶ岳七本槍」として名前が挙がり、秀吉から三千石の恩賞を授けられている。

しかし風丸は、刀から手を放そうとはしない。貞隆も同じだった。

且元は段々と苛立ちを覚えていた。

「……では、刀から手を放していただけませんか？於義丸様もお待ちかねのご様子ですし……」

「それは私にではなく、あなたのご兄弟におっしゃっていただけませんか？」

風丸は口元に笑みを浮かべ、挑発的な調子で言った。

「ここまで激しい殺気を放っている相手を前にして、警戒を緩める訳にはいきませんから……」

それを聞き、貞隆の顔がさっと色を帯びた。が、刀を抜く前に、且元が彼を止めた。

「よせ、問題を起こすなと言われていただろうが！」

貞隆はいかにもしぶしぶといった様子で、ゆっくりと刀の柄から手を放した。それを見て、風丸も手を下ろし、姿勢を正した。口元は笑ったままである。

「では、主を連れてまいります。ご案内していただけなのですよね？」

且元が頷くと、風丸は再び馬にまたがった。

「待て！」

貞隆だ。

「……なんでしょう？片桐……」

風丸は名前を思い出そうとしているかのように首をかしげた。

「貴様……！」

「……失礼、貞隆どの」

風丸は笑いを堪えていた。少し触っただけで面白いほど反応を示す。

反対に、貞隆は不機嫌だった。

「……名を名乗ってもらいたい」

「松平風康と申します」

「……！？ 風……！？」

明らかに、且元の反応は大きすぎた。

「……どうされました？」

「……あ、いえ……」

且元は目を逸らした。

「……そういつ、「噂」を耳にしたことがあるだけです……」「噂」を……」

風丸は馬上から彼を見ていたが、結局何も言わずに向きを変えた。

この二人、片桐且元および片桐貞隆兄弟は、天正七年より羽柴秀吉に仕えていたとされている。

その「同期」には、かの有名な石田三成がいる。

第二十五話

使者（後書き）

本当に気まぐれ更新で申し訳ないですf（^ー^；）

確か「ルナ・ドーム」が完結した頃に、「そろそろ完結させる！」的な発言をしたんですが……。

いやはや、なかなか書けないもんですな。

こないいい加減な作者でありますけど、どうかこの作品は見捨てないでやってください！笑

田中 遼

第二十六話

じゃれ合い

片桐兄弟が一向に加わってから、胡蝶は始めのように笠を深く被り、顔を隠して馬にまたがっていた。

彼女は風丸に合図を送り、彼女がいる後方まで呼んだ。

そして彼が近づいてくると、小声で話しかけた。

「……風丸、あの兄弟、そんなに信用できないの？」

風丸は半分笑って、先頭で馬を歩ませている二人を見た。

貞隆は未だに風丸をちらちらと睨んでいる。

「……ま、今のところ」

「……でも、心配なのはあの弟さんより、お兄さんのほうだね……。何か裏がありそう……」

風丸は驚いて胡蝶を見た。胡蝶はニツと歯を見せる。

「でしょ？風丸」

彼は一瞬目をぱちくりさせた後、ぷつと吹き出した。

「さすが、城下一の……」

しかし、胡蝶はそれを遮った。

「「才女」、よね？」

風丸は半ば笑って、呆れたように首を振った。

「やれやれ、その通りその通り……」

「……風？」

胡蝶は於義丸に言ったように言った。しかし、風丸が彼女を恐れるわけもなく、一段と笑っただけだった。

胡蝶は笠の下でぷつと膨れ、横を向いた。

風丸はクスクス笑いながら、その肩をぼんぼん叩いた。

貞隆はその様子を睨みつけ、

（務めの最中に何をやってやがる）

と、苛立っていた。

風丸が仲間とじゃれあっている子供にしか見えなかったのだ。

「……貞隆」

且元が小声で言った。

「……兄上」

「……どう思う？」

そしてくいつと風丸を指した。

貞隆はペツと唾を吐いた。

「……こんな時に主を他人に任せ、友とじゃれあっているなど、大したものではない証拠といえましょう。ただの生意気なガキですよ」

しかし且元は、「ふむ」と唸った。

「……そういう見方もあるな」

貞隆は眉ををひそめ、兄の顔をうかがった。

且元はずっと前を見ている。

彼は自らの言葉に含まれている意味を話そうとはしなかった。

且元は横を歩いている貞隆にも、風丸のすぐ傍にいる胡蝶にも気付かずに、風丸を見ていた。

見続けていた。

そして、貞隆とは真逆の結論に達したのだ。

(……これは大した男だ)

己に向けられている視線に気付いているだけではなく、それがどこから来ているかまで、しっかりと認識している。

しかし、ごく自然に振舞っているのだ。

しかもそれでいて、警戒も忘れていない。

且元は笠を被っているものが何者かは知らないが、その者を彼から遠ざけようとしているのが分かった。

しかしそれも、且元以外には、笠の者にすら分かっていないかも知れない。

(……しかし、まだ少し甘い)

且元は思った。

(……女子だな)

彼は誰にも気付かれず、口元を吊り上げて笑った。

第二十七話

羽柴秀吉

羽柴秀吉は、この当時、山崎城を使用していた。

これは、かの有名な「天王山」にある城である。

さて、一行は無事に到着し、通された部屋で秀吉が来るのを待っていた。

(……妙だな)

風丸は思った。

彼らは長い旅路の後、休息する間もなくこの部屋に通された。

それも、従者も全て、だ。

(……「何も準備させないように」、か?)

風丸は、従者の中でも一番下座に座っていた。

単純な理由である。

全員を観察する　「見張る」といったほうが良いかもしれないのに、そこが最も適していたからだ。

風丸は「キツネ」の横に座っている若い従者の様子が、道中とまるで違っていることに気付いた。

目が、違う。

道中彼は、周囲に油断なく目を配り、振りかかるかも知れない「危険」に注意を払っていた。

それは言うなれば「草食獣」の目だ。

しかし。

今の彼には、馬や鹿のような用心深さは全くなかった。

ましてや、狐や猿のような
そして人間のような
ずる賢
さもない。

彼の目は、虎のそれだった。

獲物を眺める虎の気品が、優雅さが彼にはあった。

風丸は思った。

（正就も力をつけたもんだ）

「服部正就」。

この名前を覚えていらっしやるだろうか。

思い出していただきたい。

かつて、風丸に苦内を投げつけたこともある、忍びの者である。

父、服部平蔵とともに徳川家康に仕えている彼が、ここにいる。

目的は明白である。

と、その時、どたばたと騒がしい足音が近づいてきた。

その部屋にいた者たちは、平伏し、その足音の主を待った。

男は入ってくるなり、叫んだ。

「おお！！於義丸！！よう来た！！」

於義丸が礼を返している間、風丸はちらりと秀吉を見た。

まるで変わっていない。

小柄で、ひょうきんな顔をしており、立っただけでも座っただけでも、せかせかと動き出すような気配があった。

何より、顔をしかくちやにして笑う、人をひきつける笑い方がそのままだった。

しいて言うなら、服が変わった。

ぎらぎらと攻撃的までに輝いている金銀の衣装が、とんでもなく悪趣味だった。

「して、皆もご苦労であった！」

秀吉は従者のほうにも声をかけた。キツネ以下数名は、既に地面についていた頭を、こすりつけるようにして「ははあっ！！」と叫ん

だ。

ただ、風丸、平蔵、そして胡蝶は、ピクリとも動かなかつた。

そのせいだとは言えないだろうが、秀吉はしばらく、従者の一人ひとりを観察するように見ていた。

「お父上様？」

於義丸が尋ねた。（既に述べたと思うが、於義丸は秀吉の養子となっていた。実質人質という存在であったが、こう呼ぶ権利は有していたわけだ）

「ん？いや、なんでもない」

秀吉は自分のために用意された場所にドカリと腰を下ろし、「顔をよう見せてくれ」と於義丸に言った。

彼はゆっくり顔を上げ、初めて、自分の父となつた男を正面から見た。

(……確かに、猿だな)

正直に、そう思った。

彼は風丸とは違い、秀吉のことは伝え聞いているだけであったが、初めて会ったという気はまったくしなかった。

(……これほどまでに伝聞の通りというのも珍しいだろう)

それほどまでに、この「羽柴秀吉」という人間は、強烈な個性を有していた。

しかし同時に、於義丸が気付いたことがある。

(……この人は、天下人ではない……)

それは、悲しいほどに、真実であった。

第二十八話

守るべきもの

「して、お前達」

秀吉は於義丸の従者たちのうなじを見ている。

「於義丸のために、慣れ親しんだ土地を捨てた、忠実な者たちの顔を見てみたい。面を上げよ」

(……糞)

風丸は内心毒づいた。

キツネや正就が「はっ！」と声を上げ、皆で揃って顔を上げたその瞬間。

秀吉の目が、そのうちの一人に向けられた。

舐めるような、欲望の視線を浴び、その肩がビクツと動いた。

胡蝶である。

「ほう！」

秀吉はにんまり笑った。そして四つんばいではたばたと彼女の前まで行くと（胡蝶は男装している）、その顔や体を間近で観察した。

胡蝶は視線を落とし、じっとそれに耐えている。

「……お主、名前は？」

「あ……」

思わず高い声が出た。胡蝶は慌てて咳払いをして、低い声を取り繕った。

「……ま、松平元継と、申します」

秀吉は相変わらず嫌らしい笑みを浮かべている。

「松平元継……。お主、姉か妹はおらんか？」

胡蝶は「訳が分からない」と言うような顔をした。

「いえ……。兄が一人いるだけで……。姉も妹も……」

「そうか、それは残念だ。もしいれば召抱えるつもりだったのだが」
そして秀吉は豪快に笑った。しかし、風丸と胡蝶、そして於義丸は冷や汗をかいて黙りこくっている。

「まあ仕方がない」

秀吉は薄い唇をなでた。皆が只ならぬ気配を感じた。

「……？」

「ならばお主を召抱えることにしよう」

秀吉は言葉と同時に手を伸ばし、胡蝶の顎をぐいと上に持ち上げた。

「!?!」

胡蝶は危つく声を上げそうになったところを堪えた。目の前の男はまだ、「知っている」「わけではない。」

「……な、何を……?」

「ほう、このわしを前にして、まだとぼける気か?」

手に力がこもった。

(……痛い……!)

しかし、胡蝶は耐えた。

そうしないと自分を守れないと思った。

秀吉が「手当たりしだい」ということはよく知っている。

女だとばれたら何をされるか……

と、その時、胡蝶が恐怖を覚えるほど冷たい声が出た。

「手を放してやっていただけませんか?」

秀吉は笑みを浮かべたまま、ゆっくりとそちらに向き直った。

もちろん、胡蝶を放そうとはしない。

「わしに言ったのか？」

風丸だ。

彼は表情のない目で、ただ、前を見ている。

「はい。そのような行為は止めていただきたい」

秀吉は手を下ろした。

胡蝶はようやく息をつく。

秀吉の小柄な体から怒りの気があふれるように発揮されていたが、相変わらず風丸はそちらを見ようともしない。

彼は言った。

「…………お察しの通り、それは女子おなです」

胡蝶と於義丸は息を呑んだ。

それを隠すために、いろいろと策を講じてきたのではないか。

案の定、秀吉は危険な笑みを浮かべている。

於義丸はそれを感じ、すかさず手を床につけた。

「お言葉ですが……………！！」

「待て」

秀吉が於義丸を黙らせる。

彼はゆっくりと風丸の横に行き、そこにドカリと腰を下ろした。

風丸はまだ前を見ている。

「……それで？女子なればわしは召抱えるつもりだ。問題あるのか？」

言葉の裏に、「この秀吉に楯突こうと言うのか？」という強烈な脅しが込められている。

しかし。

「あります」

風丸は動じない。

「なんだと……!?!」

怒る秀吉に、風丸が初めて目を合わせた。

「その者は私の妻です」

風丸は見たただけだ。

ただそれだけで、天下人が気圧された。

圧倒的に。

秀吉はのけぞりそうになるのを堪えながら、似たような感覚を昔感じたことがあるのを思い出した。

しかし、それがいつ、どこであるかを思案する余裕さえ、彼にはなかった。

秀吉に出来たのは「我は天下人なり！」という彼自身の作り上げた仮面、ある人々にとって大した意味を持たない、ただの虚勢を保つことだけだった。

「……だから、なんだと言うのだ？」

彼は「自分は奪うことも出来る」ことを言いたかった。

実際にそうするかどうかは別として、とにかくそうでなくってはならなかった。

彼は天下を勝ち取った「勝者」なのだから。

「もし」

風丸は静かに秀吉を見つめている。

「お屋形様がまだ胡蝶を　　この者の名ですが　　奪うおつもりなら、私は……」

「……？」

この時、風丸は初めて、目に力を込め、秀吉をねめつけた。

「お屋形様を斬ります」

一瞬、その場が凍りついた。

第二十九話

黄金ではない輝き

その場にいた全員が、恐る恐る秀吉をつがっている。

いつ風丸の首が飛ぶか。

考えているのはそれだけである。

しかし、秀吉はそれをしなかった。

いや、出来なかった。

体が、動かない。

この時秀吉は、自分が小さな羽虫であり、それでいて森羅万象のはるか上に君臨するとてつもなく大きい何かと対峙しているかのような錯覚にとらわれていた。

背筋を冷たいものが伝う。

自分の顔から表情が消えるのが分かる。

秀吉はとてつもない衝撃を受けながら思った。

(わしは、この秀吉は、今日の前にいるこの若者を、恐れているのか……!?)

風丸の手に武器はない。

また、彼には殺気すらなかった。

彼が抜き身の刀のような殺気を放ったのは先刻の一瞬だけ。

今はただ、見ているだけである。

それだけで、秀吉は飲み込まれそうになっている。

(しかし、この感じどこかで……)

瞬間、秀吉はそれを思い出した。

同時にもともと引いていた血の気が、さらに猛然と後ろに下がるのを感じた。

「……お主、名は？」

やっと搾り出した声は、囁きにしかならなかった。

風丸はわずかに頭を下げた。

「松平風康にございます」

「松平……風、康……？」

秀吉は愕然としながら繰り返した。

そしてふらふらと立ち上がると、よろめきながら自分の肘掛に向かい、体を投げ出すように腰を下ろした。

（噂は聞いていた……）

「あの時」、「あそこ」から、二人の少年が逃げ延びた、という噂だ。

（……もしそれが本当ならば……）

確かめなければならない。

秀吉は右手で目を覆い、絶望的な調子で尋ねた。

「その名は誰にもらった？」

風丸は静かに口を開いた。

「徳川様に」

間髪いれず秀吉が言った。

「「風」の字もか？」

風丸はわずかに微笑し、首を振った。

「いえ、それは違います」

「……だろうな」

しかし、彼はそれ以上追及しなかった。

また、風丸にも話す気はない。

秀吉は肘掛に寄りかかり、顎をなでながら最も遠くにいる風丸をじつと観察している。

もう、十分すぎるほど分かっていた。

「風」が前に出てきている今、「雷」がこの場にはいない、ということも。

「……一つ、聞きたいことがある」

「その前に一つ、言わせていただきたい」

風丸はまた少し頭を下げた。

「私は今、於義丸様に仕える身。なればすなわち、御屋方様に使えていると同じこと」

そしてわずかに顔を上げ、秀吉と視線を合わせた。

「私に、反逆の意思は微塵もございません。それだけは覚えていていただきたい」

その瞬間、秀吉は信じた。

疑う必要すら感じなかった。

しかし、同時に興味も生まれた。

「……それでありながら、わしがお前の妻を奪うなら、斬ると言うのか？」

風丸はあっさり頷いた。

「はい」

それもまた真実である。

そうなれば、風丸は間違いなく秀吉の命を絶つ。

秀吉はわずかに非難するような響きを持たせて言った。

「矛盾ではないか」

「いえ」

風丸は今度はあっさり否定する。

「私は守りたいものを守る、というだけのことです」

その驚くべき単純さに、秀吉は一瞬唾然としてしまい、思考が止まった。

しかしその後すぐ、別の感情が沸き起こってきた。

(フン)

秀吉は内心笑った。

この乱世において、天下を狙う志のない者など、秀吉にとってはも
うどうでも良かった。

(確かに、「血」は受け継いでいる)

眼光や威圧感、「気」は確かに只者ではない。

ただ、あるものが決定的に足りない。

秀吉はそう思った。

(恐れるべきは、やはり「雷」の字……!!)

秀吉は風丸を侮った。

その一事で彼の人生が表せるわけではない。

ただしかし、彼に理解できなかつた何かを確かに示している。

それは言うなれば、こがね黄金ではない輝きであり、殺すことのない強さ

であり、空し手の「勝利」であった。

風丸が持ち、また目指しているのは、まさにそれである。

秀吉には、分からなかった。

第三十話

羽柴秀康

於義丸が元服し、羽柴秀康と名乗るようになったのは、そのすぐ後のことだった。

秀吉の「秀」の字と、家康の「康」の字を賜り、その二人の和解を象徴するかのような名であった。

「まこと馬鹿馬鹿しい。そう思いませぬか姉さま？」

於義丸　　秀康は肘掛に寄りかかりながら、前に座っている胡蝶に話しかけた。

秀康、胡蝶、風丸の三人しかその場にいなかった。

「え？」

胡蝶は自分の隣の風丸を見、もう一度秀康に視線を戻した。

「何が？」

「この立場、ですよ。ねえ風兄？」

「無礼を承知で言わせていただくなら」

「うん？」

「滑稽ですね」

その遠慮のない言い方に、胡蝶はさすがに目を丸くした。

しかし秀康は声を上げて笑う。

「アハハ！ ホントに！」

胡蝶はその笑い方に嘘が混ざっているのに気付いた。

決して本心から笑っているわけではないのだ。

彼は痛みを覚えていた。

それで笑い終わると、視線を落とし、呟くように言った。

「両家の架け橋なんじゃない。どちらの側にもはじかれただけだ」

胡蝶は風丸を睨みつけた。

彼の言葉で秀康が傷ついたのは明白だったからだ。

しかし、彼女が口を開く前に、秀康が二人に尋ねた。

「わしが徳川のお父上にこれほど忌み嫌われている理由を？」

「……いいえ」

胡蝶が遠慮がちに首を振った。

否定しても仕方がないほど家康の態度は露骨だった。

秀康は鼻を鳴らして言った。

「双子、だからだそうだ」

「えっ？」と胡蝶は風丸を見る。

しかし風丸は全く反応しない。

秀康は構わず続けた。

「犬猫と同じだと言っただ。一度に二人の子を宿す女子を」

「畜生腹」という言葉があった。

「畜生」。つまりは獣である。

秀康は唇をかみ締める。

「それでわしも血が悪いと罵られた。見たことも会ったこともない兄弟のせいだな！」

秀康は自分の声に驚き、はっと顔を上げた。

「す、すまぬ。こんな弱音を吐くつもりで二人を呼んだわけではないのだが」

「いえ、構いませんよ」

風丸は彼を静かに見ている。

「我らに心の内を明かしてくださったことを感謝します」

秀康はそれに笑顔で答えた後、ふと胡蝶の顔を覗き込んだ。

「……姉さん。何か言いたいことが？」

「え、あ……」

胡蝶は風丸をちらっと見やった。

風丸は彼女の言いたいことを察していたので、少し笑って小さく頷いた。

「……胡蝶は私の兄のことを思い出したようです」

「兄？ 初耳だな？」

「はい」

風丸はふつと上を見上げた。

「私の自慢の、双子の兄です」

「双子の……兄……!？」

「ではそなたも……!？」

と秀康が言いかけたのを風丸はすぐに遮る。

「いえ、私たちの父はそうした考えを嫌っていました」

「ほっ?」

それで風丸は「父」の言葉を教えた。

「一人が生まれてめでたい。しかし二人が生まれるとめでたくないなど、道理に合わないことは言うな」

その言葉を聞き、秀康は声を上げて笑う。

「確かにその通りだな！」

風丸は静かに笑っている。

秀康は不思議と気分が楽になっていくのを感じていた。

(しかし)

秀康は思った。

(その言葉、誰かが父上に言っていた……)

家康を叱り付けるように言うその男の顔を、彼はぼんやりとしか
思い出せない。

(一体誰だ？ 父上を叱責できるようなお方がそういるものなのか
……？)

秀康はその面影を風丸の顔に見つけ、戦きを覚える。

(この人は何者なんだ……？)

この時より、彼の風丸に対する態度はさらに「近く」なる。

それでも、風丸が彼に敬意を欠くことはなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3122d/>

時は戦国

2011年10月4日17時05分発行